
大空のサイネリア

かなめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大空のサイネリア

【Nコード】

N2259Z

【作者名】

かなめ

【あらすじ】

海鳴市の高校に通う青年大空崇は全く未知のエネルギーを利用した飛行装置を開発していた。ある日アメリカからそのエネルギーについて詳細の説明を求める招待状が届く。それが崇の運命の転機だった。アメリカへ向かう機上、彼は意識を失い……気がつくと見知らぬ場所にいた。崇の目の前に現れたのはジェイル・スカリエッティと名乗る男。彼は言った「その技術は、君の世界ではまだ時期尚早」と。しかし、その技術を有効に活かすことの出来る世界が存在するという話を聞かされ、崇は彼の描く計画に乗る決断を下

す。
そして数年後、物語は再び海鳴市を中心に動き出す……—

プロローグ1

【新暦XX年　?????】

「ついにできた」

薄暗い研究室で、顔に皺の目立ってきた男が完成した機械を見上げて言った。

男の目前には彼の腰程度の高さの操作盤がある。操作盤は機能的に整理されており、簡単な操作で扱えるようになっていた。

その奥には細長い金属板が四つ立っている。金属板の中には男が開発した機器が詰め込まれているのだが、無機質な金属板に隠れて見ることはできない。また、それぞれの板には同じ魔方陣が描かれており、それが何らかの魔法器具の一種なのだと理解できる。しかし、それがどのような装置なのかは彼しか理解出来ないことだった。

「ふふつ、どうしたんだい、君も喜んでくれたまえよ」

そう言っ、彼は隣に立つ女性に目を向けた。緩やかに波打った髪にメリハリのある体つき、理想的な女性の美しさを体現したような女性は、男の隣で操作盤を見つめ俯いていた。

彼女は、男と共にこの装置を完成させるため、数年の歳月寝る間も惜しみ製作に取り組んできた。男と彼女は男女の間柄を越えた主従であり、仲間であり、そして戦友であった。

しかし……。

「そうか……。ありがとう、ウーノくん。君には長い間世話になったね。ゆっくり休んでくれ……」

男は、男の生涯で本当に数少ない回数しか言わない、心からの謝辞を述べた。

男の隣に俯き気味で立つ女性はウーノという。“一個目”という意図だけで付けた名前は、彼女が彼の作品であることを示していた。彼女、ウーノは全盛期の彼が担った“人造魔導師開発計画”“戦闘機人計画”などの最初の作品であった。しかし、どんな名前も長く使っていればほんとうの名前になる。ウーノという名は、彼女の死を持って彼女だけの名前になったのだった。

人造魔導師開発計画における最初の実験体として製造された彼女は、優秀な魔導師の細胞を素体としたクローンとして誕生した。

しかし、彼が中心として担う計画が戦闘機人開発へとシフトした頃から徐々に生体部品と機械との混合率が変動していき、今では身体を構成する大部分を機械へと変換されていた。

機械はある程度の期間ごとにメンテナンスを必要とする。しかし、彼女は忙しさを理由にここしばらくメンテナンスを行っていないかったはずだ。

それが理由か、と男は、いつも心配気な表情で「ドクター」と呼んでくれた女性を見つめる。

『ドクター、本懐を遂げてください』

そんな声が聞こえたような気がして、男は小さく苦笑を浮かべる。

「ふふふ、君は最後まで変わらない……」

男は呟きながら操作盤の計器をいくつか操作する。すると、黒く沈黙を保っていた大きな四枚の金属板が淡く輝きだし、金属板に囲まれた地面に魔方阵が浮かび上がった。

「さて、それではやるとしようか」

男が魔方陣へと足を踏み入れたとき、背後の扉が勢い良く開かれた。

「時空管理局執務官、フェイト・Ｔ・ハラオウンです。広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ。脱獄及びその他多数の罪状によって、あなたの身柄を拘束します！」

黒い制服を纏った金髪の女性が、金色の光を発生させる剣を片手に部屋に乱入してきたのを、淡い光に包まれながら男は見た。

「プロジェクトＦの残滓、フェイトくんか……君との付き合いも長いというのに、君は常に美しい」

「なっ、そんなことはどうでもいい！ おとなしく縛につきなさい！」

「ふふふ、それはできない相談だね。君との鬼ごっこも楽しかったが、それも今日で終いだ」

男は常から浮かべる皮肉めいた笑みを浮かべて言う。淡い光は男にまとわりつきはじめ、キラキラと明滅を繰り返している。

「それは、どういう……」

「君には決して理解することは出来まいよ。そしてまた、理解する機会もない。いずれまた、異なる時間の流れで会うこともあるうが、君との付き合いもこれまでだ」

男にまとわりついていた光が彼の身体から離れていくと、彼の身体はまるで虫食いにでもあったかのようにその部分から消えていく。

「えっ、ま、待て、ジェイル・スカリエッティ！」

新車の転送魔法かと慌て、しかしとっさに踏み出し損ねた彼女の前で、男の姿は徐々に消えてゆく。

「君たちと共にある、私の娘たちによろしく言うておいてくれたまえ」

“予定通り”火花を散らし始めた——計画の終了後に確実に全壊するだろう——金属板や操作盤にちらりと目を向けながら、それだけを言い残して、彼女の前で、“ジェイル・スカリエッティ”、“無限の欲望”あるいは“ドクター”などと呼ばれ、世界を震撼させてきた男は姿を消した。

——《ジェイル・スカリエッティ失踪》というニュースで世界を震撼させて……。

プロローグ1（後書き）

初投稿になります。

執筆ペースはドンガメなので、ゆっくりゆっくり進みます。話自体もゆっくりゆっくり進みます。末永くお付き合いください。

誤字脱字等ありましたらご指摘ください。

ブローグ2

【西暦2002年 県内某高校】

「出来ましたか」

目の前に鎮座する機械を見つめ、男は額の汗を拭った。

長方形の箱型フレームに、飛行機のような翼を二つ取り付け、箱の片面には肩に背負うための革製のベルトが付けられ、空中で操作するためのハンドルが箱の底面から伸びている。

ハングライダーで空を滑空する装置のように見えるが、ハングライダーも空中での動力を得る送風機もなかった。けれども、箱の中にはエンジンが収められている。

「苦節数年ではありますが、感慨もひとしおですね。さて、小型化と持ち運びの便を考える段取りに移りますか」

男は口で言うほどの感慨を感じさせることもなく、機械を無視して作業机へと足を向けた。

コンコンッ

「失礼します」

作業場の扉をノックして、少女が入室してきた。

「おや、柏木さん。どうなさいました？」

「あ、はい。会長にお手紙が……」

「そうですか、ありがとう」

柔らかに微笑みながら手紙——エメールのようだ——を少女の手から受け取ると、少女はまだ何かもじもじしていたものの、男が興味を示さないのを見て諦めたのか小さく微笑んでそそくさと入ってきた扉から出て行った。

「ふむ……」

静かになったところで封筒を開ける。中に入っていた紙を開き——通り目を通すと小さく頷いた。

「困りましたね」

男は作業机へと向かおうとしていた足を再び翼のついた機械に向けると呟いた。

「さすがにまだアメリカへは飛んでいけませんよ……？」

……

……

……

……

……

.....

.....

「考えて見れば、分解してしまえばよかったんですよ」

リクライニングさせたシートに身体を預け、男は呟いた。

あのあと、男は半ば本気でアメリカへと自作の機械で飛んでいくかという方法を考え、考え抜いた末に分解・輸送という手段をとるに至った。

そして無事旅客機のシートに収まっているわけだ……。

「ふむ、到着するまで暇ですし小型化案を練るとしましょう」

そう言って、予め出しておいたノートと、常に携帯しているペンに手を伸ばそうとした時だった。

「さすがにあのエンジンは時期尚早だそうですよ」

「っ！」

男は、突然背後から聞こえてきた女性の声に、背筋を凍らせる。

その声は特段聞き覚えのあるものではなかったのだが、その言葉に含まれる単語が耳についた。

「おかしい話ですね、私はまだアレのことを誰かに明かした覚えはありませんが？」

「いいえ、あなたが以前学会に提出した論文が問題でした。あの件と、それを応用した技術は、まだ“この世界”には時期尚早です」

「……ほう、面白いことをおっしゃいますね。それで、私を消す、

などと？」

彼は鋭く女性を睨もうとした。しかし、その瞬間彼の体から力が抜け、同時に意識が刈り取られていった。

「いいえ、もつとあなたの研究が捗る場所へご招待します。ミスタ・オオゾラ」

その声を耳にしながら、彼の意識は闇の中に落ちていった……。

「……たまえ、……起きたまえ」

「む……ん……？」

朦朧とした意識が浮上していくなか、誰かに呼びかけられているのを感じて、男は目を覚ました。一体何が、と深く考えるまもなく、直前のことが脳裏に思い出される。

「……っ！」

「目が醒めたか。まあ落ち着きたまえよ、我々は君を悪いようにはしないつもりなのだからね」

「……そうですね、気を失う直前にそう伺った覚えがあります。詳しい説明を求めます」

二度三度頭を振って眠気を飛ばした男は、目の前に立ちニヤニヤとこちらを見下ろしている男を睨みつけた。その表情以外には爛々という言葉表現したような金色の瞳が目を引く、中途半端に伸ば

した紫色の髪をした若い男だ。

「おや、怖い顔をしないでくれたまえ」

「……すみませんね、これは地顔ですの」

「そうなのかい？　ちなみに僕も地顔だよ。同じ地顔同土腹を割って話そうじゃないか」

「ええ、そうですね。とりあえず腹を割ってという部分については賛成です」

二人の男はニヤ、と口端を釣り上げてフッフと笑いあった。

「とりあえず、彼の拘束を解いてあげたまえ」

「はい、ドクター」

「む、あなたは……」

「ああ、君を迎えに行かせた——僕の忠実な助手でありパートナーであるウーノくんだよ」

「ウーノさん……ですか」

「ウーノで結構ですよ、ミスタ・オオゾラ」

「私の名前を……ああ、知っているのでしたね」

「そう、君の名はよく知っている。次世代高効率新エネルギー理論の構築者で、あの第97管理外世界と呼ばれている星ではじめて体系的に魔力という概念を論証し、さらにはその理論を実証する形で不完全ながらも魔力炉を完成させた科学者……」

「なんだか、改めて言われると凄いことをしたような気分になりますね」

「ふふふ、実際ものすごいことをしたのだよ、もっと誇っていい。もっとも、あの世界では高校生の言うことなど誰もまともに取り合わなかったようだがね」

ドクターと呼ばれている男は、彼が招待した男の業績を褒めたた

えながら、だんだんと自分の世界に没入しているように見えた。

「だが、僕は君の理論をより完璧なものへ近づけ、また次の段階へと進む手伝いをできると自負している。僕は君を歓迎するよ、地球の優秀な科学者、大空崇くん」

「崇で結構ですよ。そして喜んで歓迎を受けましょう。ドクター……？」

「ジェイル・スカリエッティだよ。なに、しがない科学者さ」

ふたりが互いに向き合い不敵に笑いあうのを、傍らに立ったウーノは黙って見守っていた。

第一話・その1

【新暦62年5月17日 研究所】

「さて、初めに聞いておくが、君は理論を学ぶことは好きかね？」

おそろたかし
薄暗い洞窟を改良した研究所内で、ジェイル・スカリエッティは
大空崇に問いかけた。単純なことを聞くのにも何故か大振りなジェ
スチャーをするのは彼の癖だった。

「理論、ですか。言わずもがなですね。基礎が分かればあとはどう
にでもなります」

「なるほど、ではそのあたりはウーノくんから説明させよう」

「……あなたではないのですか」

スカリエッティの隣に歩み出てきたウーノを見て、再びスカリエ
ッティに視線を戻して問いかける。

「いやなに、そう言うことはウーノくんのほうが得意なのだよ」

理論の構築と実践は得意だが説明は苦手だね。回りくどい、とよ
く言われるよとスカリエッティは苦笑する。

「なるほど。それではご教授を願います、ウーノさん」

「呼び捨てで結構ですよ。ではこちらへ。少々長い話になると思っ
ますので」

「ええ、わかりました」

ウーノに促されてかたわらの椅子に腰掛けると、目の前の空間に半透明のディスプレイが浮かび上がった。空間ディスプレイと呼ばれる技術だ。スカリエツティやウーノが暮らす世界では一般的な技術も、崇の暮らす地球ではまだ空想の産物に過ぎない。

「ほう、まるで魔法のようだ」

崇は目を見張り、次いでしげしげとそれを眺めながら言う。

「そうですね？ ですがこれは、我々の世界ではメジャーな科学技術です」

「ふむ、なるほど……レベルの違う技術は、時に魔法のように映るということですね」

一般的に知られ、普及するレベル以上の技術は、時にそれを見るものにとって魔法のように映るという。それは太古の昔から変わらない。神の力しかり魔術、錬金術しかり、そして時には現代科学でさえ魔法のような技術を生む。

「そうです。我々の世界で普及している魔法も、突き詰めて考えれば高次に進化した科学技術の結晶にほかなりません。しかしそこには明確に崇様の世界と異なる点があります」

「基板となるエネルギー、ですね」

崇が答えるのにあわせ、ディスプレイにいくつかのワイヤーモデルが描かれる。どうやら各種発電所のようだ。

「はい。崇様の世界では火力、水力、原子力などといったエネルギー基板があることは確認しました。複数のエネルギー源を持っていることは、緊急時にも何らかのエネルギーを得られるということでは

すから、悪いことはありません」

「ですが、今はその話は……」

「そうですね、あまり関係ありません。さて、我々の世界にもそういったエネルギーはありました」

「ました……過去形ですか」

「はい。そのようなエネルギー源も考案されましたが、我々の世界にはそれよりはるかに効率がよく運用できるエネルギーがあつたのです」

ウーノの隣に現れているディスプレイの画像が変化する。輪郭だけの人形がディスプレイの中に描かれている。

「それが“魔法”というわけですね？」

「はい。魔法科学などと言われることもあります。名称はそのまま魔法で問題ありません。そのエネルギー源は“魔力”と呼ばれています。このエネルギーは世界のどこにでも存在していますが、空気などと同じように肉眼で視認することはほぼ不可能です」

ウーノはディスプレイの画像を示しながらレクチャーをする。

「しかし、そこに“ある”ことが分かっている以上利用することは可能なので、我々はそれを科学技術に応用しています。その結果、お茶の間から次元空間を飛翔する艦船まで様々な分野に利用されています」

「ふむ、もちろん軍事方面にも利用はされているはずですね？」

「ええ、もちろんです。むしろ軍事面で時代遅れとなったものが民間に下りてくる体制ですので、まあ、このようなことは崇様の世界とも変わらないはずですよ」

崇はそれに頷く。そんなことはどこの世界でも共通のことだと、

崇は既に割り切っている。それに、そのようなことをいちいち気にしては科学者は務まらない。

「そして、軍事面に転用された技術を、“魔法”と呼びます」

「先ほどとはニュアンスが違うようですね？」

「はい。先程から様々な技術を魔法と呼んでいると言ってきましたが、単純に“魔法”という戦闘面に特化した技術のことを主に指すことが多いのです」

あなたもなかなか回りくどくおっしゃると苦笑する崇の前で、ディスプレイ上の人形の中心に光点が浮かぶ。

「これはリンカーコアと呼ばれる器官です。原理は今持つて解明されておりませんが、人間で言ううちょうど心臓のあたりに存在します。この器官は大気中に含まれる魔力素を呼吸するかのように取り込み、また排出しています。取り込まれた魔力素は体内を流れ身体の活力のもととなっているようです」

「なるほど、俗に“気”などと呼ばれているものなどがこれに該当しそうですね」

「考えとしては近いと思います。さて、魔法を扱うにはそのリンカーコアによって得られる魔力を練り上げ、放出する必要があります」

ディスプレイの人形の片手に棒が加えられた。先端に宝石を模した円が付いていることから、どうやら杖を表しているようだ。

「その作業は非常に煩雑で、大抵の場合デバイスと呼ばれる杖によって補助がなされています。……稀にデバイスなしで魔法を行使するものもあります」

「なるほど、デバイスという杖ですか。私が考える通りならば、その杖にAIなどを搭載して、機械的に処理をさせたほうが効率よく

魔法を行使させることができそうですね」

「はい、まさにその通りで、魔法使いの杖には簡単なものから高度なものまで何らかのAIが搭載されていて、それが魔法を行使する際に用いる魔方陣の構築や効率のよい魔力の運用を補助してくれます」

「そうですね、興味が惹かれますね。しかし、どこに私の研究していた技術が入り込む余地があるのか、このままではわかりませんね」

そうですね、話を続けますとウーノはディスプレイ上の杖を持った人形にドレスを着せた。

「それは？」

「このドレス……まあ、使用者によって形は様々ですが、これはバリアジャケットという魔法使いの鎧です」

「読んで字のごとく防護服ということですか。なるほど、この部分ならあれを応用することは可能そうですね」

「ええ、ドクターの想定としてはバリアジャケットに組み込むことで使用者本人の保有魔力以上の魔力を使用することが出来るだろうとのことですよ」

「なるほど。小型化さえ成功すれば、それも夢のたぐいではなくなりますね」

ようやく満足のいく理由を得られた、と崇は頷いた。

「はい。そのための協力は惜しむなとドクターから仰せつかりますから、なんなりと」

「そうですね。それで、代価は何を支払えばよろしいのでしょうか？これだけされておしまいというほど虫の良い話ではないと思いますが」

「ドクターは、崇様が開発された技術の貸与を希望しています。現

状はそれだけ。そして今後もそれだけのことです」

「なるほど、十分な代価ですね。……ではとりあえず、魔法技術関連資料の閲覧許可と、デバイスを一ついただだけませんか？」

「わかりました。ドクターに伺っておきます」

ウーノがディスプレイを閉じウーノによる基礎講座は終了した。そこでふと、崇はスカリエッティの姿がないことに気づいた。

「おや？ ドクターはどうしました？」

「ああ、ドクターは先ほど自分の研究をすると部屋を出ていかれました」

「ほう、ご自分の研究を……」

「見に行かれますか？」

なんでもないことのように尋ねられ、崇は気づかず頷いていた。しかし、頷いてしまったことに気付いてから尋ね返した。

「拝見したいとは思いますが、いいのですか？」

それに対して、ウーノは静かに頷いた。

「ええ、ドクターからも話が終わったら連れてくるようにと言われているので」

「そうですか。では、お願いします」

崇は椅子から立ち上がった。

第一話・その2

【新暦62年5月17日 研究所・第一研究室】

「ドクター、崇様をお連れしました」

パシュッと圧搾空気の排出音を立てながら扉が開く。妙なところがハイテクだと呆れと感心を半々にウーノに続いて崇は部屋に入った。

「来たかね。しばらく待っていたまえ」

何かの液体が満たされたシリンダーの前で、扉に背を向けたスカリエッティは空中に出現させたキーボードを高速でタイプしていた。顔を崇らに向ける様子もなく、目前に表示させたいくつもの空間ディスプレイを同時に見ながら作業をしている。

「便利そうですね」

それを見ながらポツリと呟くと、ウーノが首を傾げて問いかけた。
きた。

「空間ディスプレイのたぐいですか？」

「ええ。あれも魔法ですか？」

「あれは魔法を用いた技術ですよ。魔力資質がなくとも操作できます」

「そうですね。……そういえば、私にも魔力があるのでしょうか？」

そう尋ねると、ウーノは虚を突かれたように目を瞬かせ、次いで得心が行ったとばかりに頷いた。

「崇様が管理外世界出身なのを忘れていました」

時空管理局という組織が認知し、文化の保護や災害等の援助を協定している世界を管理世界。認知はしているが魔法文明に縁がない、現状での接触は何らかの波風を立てると判断した世界を管理外世界と呼ぶ、とウーノは簡単に説明した。

「たしかに現在の地球は魔法とは縁がありませんね」

「とはいえ、時空管理局をはじめとした組織や次元世界に地球出身という方は相当数いますけどね」

「ほう。私のように何らかの方法で魔法世界と交流を持ったものがあるということですね。まあ、それだけでなくも昔は魔法も普通に使われていたと伝説は残っていますし、それが事実だったというだけでしょうか」

ウーノの説明から、崇は推察をはじめ、一人で納得していた。

「では、魔力を計測してみますか？」

最低限、魔力素を感知できる程度に魔力はあるはずですが、とウーノは崇に持ちかけた。もちろん、崇は頷いて返したのだった。

……

……

.....

.....

.....

「残念、といえば残念ですが、不満ではありません」

魔力資質の確認を終えた崇は、試験結果を見て言った。

崇の持つ紙には、《空戦Bランク相当》という簡素な文字が書かれていた。一般的な時空管理局武装隊員並という評価は、崇に大した感慨も抱かせなかった。一般隊員並と言われても、比較対象がないので正確な評価を下せないだけだ。

それでも、臨時にオーソドックスなストレージデバイスを貸与され、ウーノのレクチャーによって魔力を行使する方法を習い、実際に飛行戦闘をこなすまでに三十分もかからないという驚異的な時間で魔法を習得した崇は、わずかに満足そうに見えた。

続いて行われた魔力資質の確認も空戦Bランクという直前の評価以上の結果をたたき出したことは、試験を担当したウーノはもとより当事者である崇すら驚かせた。もっとも、崇自身の反応は鈍く、慣れない魔力行使に疲れているような様子を感じさせた。

「疲れましたか？」

「は？ ああ、いえ、知識として知っていても、実際に自ら使ってみるとやはり違うものだと感じられたもので。ひとつ新しい世界が見えてきたような気がします」

「……そうですか。魔力資質の確認結果からすると、魔力の制御能力やエネルギー変換効率が頭ひとつ飛び抜けていますね。とはいえ、まだ慣れないうちの検査ですから、今後の修練次第では魔導師ラン

クを含め十分に成長の余地があると思われます」

「ええ、それが不満ではないという理由です。残念というのは、私でも初回はこの程度という点ですね」

やはり私は技術屋ですねえ、と崇は皮肉げに言う。

「初回から常識を上回る結果を出すような魔導師は、その方面の天才か、もしくは化物です」

「なるほど、たしかにそのとおりですね。それが味方なら心強いですが、敵に回ったら勝つのは相当面倒でしょうね」

しかし、崇の表情は笑みを浮かべていて、言葉ほど難度を感じていないことを伺わせていた。

「さて、そろそろドクターの作業も一段落付いている頃のはずです。そろそろ研究室へ戻りましょう」

ストレージデバイスの先端に紫の魔力光を発生させて遊んでいた崇に促したとき、タイミングよくスカリエッティから通信が入った。

『やあ、先程は済まなかったね。準備が整ったからこちらへ戻ってくれたまえ』

「準備？」

空間ディスプレイに映し出されたスカリエッティはパーティを心待ちにしている子供のようには輝いている。

『そうだよ。まあ、こちらへ来てから話しても遅くはない。待っているよ』

スカリエッティはそれだけ言うと一方的に通信を絶ってしまった。仕方無しに、崇はウーノと共にスカリエッティの待つ第一研究室へと、もと来た道に戻るのだった。

「来たね」

先程は扉を背を向けて作業を続けていたスカリエッティだったが、崇たちが研究室へ入ると、今度は正面を向いて出迎えてくれた。

「それで、一体なんの準備ができたと言うんです？」

「その前に、僕がどのような研究をしているかを紹介しておこう。なあに、これから手を携えていく者同士隠し事は極力なしでいきたいからね」

「極力ね……」

「そう、極力だよ」

フッフと不敵に笑いあふたり。それをウーノは黙って見ている。さて、と前置きして、スカリエッティが話し始める。

「僕はね、時空管理局地上本部の要請に答える形で人造魔導師製造計画を遂行しているんだ」

再度耳にした時空管理局という単語、そして地上本部という名称に崇が首を傾げるのを見て、スカリエッティはウーノを促して簡単に説明をさせる。

「いくつも認知されている次元世界との共存状態を維持したり、時には世界の保護を行ったりする組織です。各次元世界を管理する“海”と呼ばれる本局と、管理局のある第1管理世界ミッドチルダに本部を置く地上部隊、それらに付随する形で航空部隊があります。その性質上本局では優秀な魔力適性を持つ魔導師を数多く抱えていて――」

「――その結果として、地上本部に強力な魔力資質を持つものが不足するという事態になっているんだ」

ウーノの言葉を接いで説明を始めたスカリエッティに、崇が疑問を挟む。

「それは……役割上仕方のないことなのでは？ 先ほど話しのついでに伺いましたが、本局部隊ではロストロギアという危険指定遺物とやらを扱うそうではないですか。それはかなり危険なものだとか？」

「まあね、地上部隊の管轄域でもそれなりに高魔力を有する者が犯罪を起こすことはあるけれど、それでも魔導師ランクの高い者が当たれば問題はないんだ」

「そこに一癖あるのですね？」

「そう。本局は魔導師ランクの高い魔導師をいささか強引な手段も用いながら確保している。その食指は地上部隊にも及ぶ……というわけさ」

その説明に、崇はしたり顔で頷く。

「そんなことをされた地上本部の印象は良くないでしょうね」

「もちろん、そういったことが原因で本局と地上本部の仲は険悪だよ」

「そうですか……それで、人材不足の地上を救済するための人造魔

導師ですか」

納得した、と崇は相槌をうつ。

「そう。優秀な魔導師のクローン、もしくはその細胞を元にした新しい個体の製造、非魔導師の肉体に魔力の源リンカーコアを植えつけての魔導師化……そして次なる段階として全く新しい人造生命の模索。僕はそれらを研究しているのだよ！」

どうだね！　と自信満々に両腕を広げて誇るスカリエッティだった。

第一話・その3

【新暦62年5月17日 研究所・第一研究室】

「どうだね、と言われましても、犯罪臭いものばかりではないですか？」

そもそも、地球では人間のクローン製造は合法とされていない。

「ああ、もちろん非合法だったとも」

「やはり……おや？ だった、とは？」

「管理局に協力者がいるのです。その協力者のおかげで合法的に研究が行えるというわけですね。もっとも、所在地の情報など明かしたくないことに関してはほとんど秘匿させてもらっています」

「なるほど、どちらかと言えば黒寄りのグレー、といったところですね」

はい、と無感動に頷くウーノであった。

「それに、地上本部との仲介者もいる。その人物に関しては……まあ、その内紹介できるだろう。さて、そんな計画のために僕が作った作品の一つが、これだよ」

背後にそびえる、何かの液体に満たされた培養槽をスカリエッティは指し示す。先ほど訪れたときに彼が向き合っていたシリンダーだ。なにやら大仰な機械が土台に据え付けられている以外変わったところはない。

薄暗い研究室だったが、それでもシリンダーの内部に浮かぶ人影

があることに気付くことができた。シリンダーの基部から当てられる柔らかなライトが、その影を浮かび上がらせる。

小さな体だった。崇はもちろん、女性であるウーノよりもはるかに小さな体は、まだ十代にも達していない少女のものだった。やや長い髪が液体の流れにあわせて揺れている。

「こちらへ来て、彼女を目覚めさせてやってくれるかな」

促されるまま、崇はスカリエッティのもとへ近づく。すると、よりはつきり少女の裸体が目に映る。崇が近づくのに合わせて、スカリエッティはキーボードを簡単に操作する。

「いいかい？ あとはこのキーを押せば彼女は目覚める。目覚めたあとは、しっかりと彼女と目を合わせるんだよ」

「目を、ですか？ はあ、わかりました」

首を傾げながらも、崇は大したことではないと頷いた。

崇が頷いたのを確認すると、スカリエッティはウーノと共に少し離れたところへと離れて言った。そんなことをする必要があるとは、まさか陳腐な罫でも仕掛けてあるのかと軽く疑いをもちながらも、崇は実行キーを押す以外に出来ることはなかった。

ゴボツと空気を含んだ泡がシリンダーの底から湧き上がる。シリンダーに満たされた水が抜けている証拠だ。排水は滞り無く進み、シリンダー内の少女の足が、シリンダーの底面に着底し排水が完全に終了しても少女は倒れることもなく直立不動で立っている。

パシュと短い音を立てたあとシリンダーが上がっていく。ガコンと音を立てて上昇しきったシリンダーが固定される。

「この培養槽は早急に改良する必要があるね」

などと言つまらないことを言うスカリエッティを無視して、崇は培養槽に立つ少女を見つめていた。

日焼けとは無縁だった白い肌は透き通るようで、未だ閉じられたままの目にかかる睫毛は長く印象的だ。そして水中でたゆたっていた茶色に近い金髪はぼたぼたと水を滴らせていた。

「ちゃんと目覚めるといいんだけどねえ」

またも不穏なことを言うスカリエッティ。自分の作った作品とまですべておきながら何をいうのか、と崇は呆れていた。しかし、視線だけは少女から外さずにいた。

そんな崇の目の前で、スカリエッティの言葉に反応したわけではないだろうが、少女の眉がわずかに動き……髪と同じ色の瞳を覗かせた。ぼんやりとした印象を受ける瞳は、やがて焦点を結んで崇と視線がぶつかった。

しばらくは互いに無言だった。

崇の後ろのほうで安堵の溜息を漏らす音が聞こえた。それをきっかけにしたのか、少女はその小さな口を開いた。

「……マスター？」

「はい？」

「マスター！」

小さく問いかけてきた少女に、問い返す意味で返事をしたあとの少女の変化は劇的だった。その瞬間まで世界に対して無関心を貫くかのような無表情だったのが一転、輝かんばかりの笑みを浮かべて

崇へと飛びついたのだ。

「な、なんですか？」

珍しく同様をあらわにしながらも、飛びついてきた少女を決して落とすことはなくしつかりと抱きとめる崇。その背をスカリエッティの高笑いが叩く。

「なんですか、気持ち悪いですね」

「マスター、ますたあ」

スカリエッティに振り向く崇の首からぶら下がった少女は、ぐりと顔を崇の胸にこすりつけながら「マスター」と連呼している。

「そんなに可憐な少女を気持ち悪いとは、君もなかなか辛辣だね」

「……違いますよ、あなたではありません。ジェイル、説明を。今、すぐに」

「では、その間にその子を世話してまいります」

いつのまにやら、ウーノがタオル片手に近くにやって来て崇から引き剥がした少女を拭いていた。

「そうですね、この子を……スカリエッティ、この子に名前は？」

「ないよ。ふむ、僕につけて欲しいのかい？ 言っておくが僕にはネーミングセンスというものはないよ」

やけに自信満々で答えるスカリエッティに、崇は胡乱な視線を向ける。

「……………そうですか。では、そうですね、あなたの名前はサイネ

リアとしましょう」

呆れたように呟いたあと、崇は膝を折り、少女と視線を合わせて、何でもないように言った。

「さい……サイネリア？」

「ええ、サイネリア。それがあなたの名前です」

「サイネリア、良い名前です。良かったですね、サイネリア」

「うん！ マスター、ありがとう！」

気に入ってくれたようでよかったと少女——サイネリアの頭を軽く撫でてから、ウーノを促して連れていってもらった。

「さて、ドクター・スカリエッティ、説明をお願いしますね」

「ん？ ああ、もちろんだとも。君の満足がいくよう、しっかりと説明してあげるとも」

立ち上がり、スカリエッティに向き直った崇は詰問するようにスカリエッティを睨みつけたのだった。もっとも、スカリエッティには柳に風も同然だったが。

「さて……、どこから説明したものかわからないが、まず彼女が何者かというところから始めようか」

スカリエッティは、彼にしては非常に珍しく悩む様子を見せてから口を開いた。

第一話・その3（後書き）

メインヒロイン、インプリンティング。

ライトノベルの定番、ヒロインの裸を見る、特に問題なく終了。

光源氏計画ですかねえ。

第一話・その4

【新暦62年5月17日 研究所・第一研究室】

「彼女はとある魔導師の遺伝情報をかけ合わせたハイブリッドクローンなのだよ」

「ハイブリッド……クローンですか」

そんなことが可能なのか、とは聞かなかった。スカリエッティがそう言うのなら、それは可能なだろう、と今は理解することにしただけだ。あとで確認すればいいだけと考えただけとも言うが。

「もつとも、今一度同じ物を作れと言われても、可能かどうかは僕にもわからないがね。これはクローンによる人造魔導師製造計画の途中で戯れに行なった、僕のお遊びだからね」

「ほう」

戯れでそのようなことが出来るものなのか、と崇は目の前の男を見た。目の前の男は、その方面では紛れもない天才なのだろう。崇は既にそれを認めつつあった。

「その魔導師たちは非常に優秀でね、一人は射撃型の魔法使いで、その射撃魔法は砲撃とまで言われる程強力だった。しかも射撃型にありがちな防御力のなさを克服し、その防御力も卓越したものだったよ。戦闘スタイルとしてはその鉄壁とも言える防御力で相手の攻撃を受け切ったあとのカウンター……それが彼女のスタイルだね。さながら動く要塞砲かな」

スカリエッツィは遠い昔のことを思い出し反芻するように言った。

「そしてもう一人は、速さとそれを活かした一撃必殺を旨とするスピード型のファイターだ。しかもスピードだけにとらわれず、それを活かした戦闘法を模索し続けている……努力型の天才だね」

「そうですか。しかし、それがそのままサイネリアに受け継がれるとは限らないでしょう？ 魔導師の資質は人それぞれだと、先程ウィノから聞かされましたよ」

「ああ、もちろんだとも。しかし、彼女……サイネリアの力は彼女たちに比肩する。それだけは間違いない。それだけの力を有していることは僕が保障しよう。そしてまた、それが僕が二度も同じ作品を作れないだろうと考える理由だよ」

無限の欲望と呼ばれた者としては噴飯物だけだね、とスカリエッツィは苦笑する。しかし、その表情は晴れやかであった。

「どうやら、そのふたりというのはずいぶんと思い入れのある人物だったんですね？」

「ああ、とても……とてもね。実に思い入れ深いよ」

そういったとき、スカリエッツィの表情にわずかに何かの色が浮かんだが、それを理解する前にスカリエッツィの表情はもとに戻っていた。だからこそ、崇は率直に聞くことができた。

「そのふたりは、高町なのはとフェイト・テストロッサというんだよ」

その二人の名前を……。

崇とスカリエッツィのふたりは、しばらくサイネリアについて話し合っていた。それは、素体となったという二人の魔導師の話からサイネリア自身のこれからについて多岐に渡った。

そうしていると、やがて研究室の扉が開く音がした。

「ドクター、崇様、サイネリアちゃんを連れてきました」

その声に振り向くと、扉のところにウーノだけが立っていた。

（サイネリア……ちゃん？）

崇がウーノの言葉を気にしている前で、ウーノはなにやら扉の影になっている場所にいるらしいサイネリアに声をかけていた。

「やです、恥ずかしいですよ、ウーノお姉ちゃん」

（ウーノ……お姉ちゃん……ですか。一体全体何があったと言うのですかねえ）

果たして、ウーノの説得に折れたのか、ウーノに手を引かれてサイネリアが扉の影から姿を表した。

「ほっ」

崇のとなりでスカリエッツィが溜め息をこぼした。

「ほら、崇様に聞いてもらなさい？」

「あの、マスター……似合い、ますか？」

ウーノに促されて、自身の姿を崇に見せたサイネリアはウーノの趣味なのかわからないが、フリルの付いたワンピースをまとっていた。

「ウーノお姉ちゃんが選んでくれたんですけど……似合わないですか？」

何も言い返さない崇に、サイネリアは俯き加減に尋ねた。

それに答えたのは、崇ではなくスカリエッティの忍び笑いだった。

「くくつ、いや、すまない。サイネリアくん、崇くんの答えは決まっているじゃないか」

「え？」

不思議そうに聞き返してくるサイネリアに、スカリエッティはおかしそうに笑い返した。

「そうだろう？ 崇くん」

そう言つて、スカリエッティは椅子から立ち上がっていた崇に声を掛けた。

崇はスカリエッティにそう言われて、はじめて自分が立ち上がっていることに気づいた。

「おや、これは……」

それを自覚した崇は、恥ずかしげに顎をかいで、訝しげな表情を浮かべるサイネリアに近づき、腰を落として視線を合わせて頭に手

をおいた。

「とても良く似合っていますよ、サイネリア」

そう言われたサイネリアは、顔を耳まで真赤にして俯いてしまった。そしてか細い声でありがとつございますと呟くのが精一杯だった。

……

……

……

……

……

……

……

サイネリアとウーノが合流したことで、話題は自然サイネリアのことが中心になった。

話題の中心となったサイネリアは崇のとなりに椅子を並べて座っている。

「サイネリアの服はいつたいどこから？」

そうウーノに尋ねると、先程話題にしていたフェイト・テストロツサの母親からもらったものだと言われた。

「サイネリアちゃんは可愛らしくて、着せ替えがいがあります」

ウーノが嬉しそうにいうとサイネリアは「ちょっと疲れたけど、楽しかった」と答えてウーノを身悶えさせていた。容姿は全く似つかないが、二人の様子はまるで姉妹のように親密だ。

しばらくはその話題が続き、「今度ミッドに服を見に行きましょうね」とふたりが約束し合ったのを機に、崇は話題を転換した。

「そのフェイト・テストロツサの母親という方にお礼を言わないといけません。それ以前にサイネリアの今後についても決めないといけません。ジェイルのことです、単に私の助手をさせるためだけにサイネリアを目覚めさせたわけではないのでしょうか？」

「ふふつ、さすがに分かっているね。君とサイネリアくんには、僕の計画の手伝いをしてもらいたいと思っっているんだよ」

「なるほど。それで、いつ？」

「そうだね、まずは三年弱、といったところかな。新暦六十五年の春までにはサイネリアと、もちろん君自身も準備を仕上げてもらいたい」

考えるように言うスカリエッティは、試すような表情で崇を見た。それに崇は唇の端を吊り上げて笑った。

「ふつ、私の方は二年もあれば十分ですよ」

「わ、わたしも頑張ります！」

崇のとなりで、サイネリアも小さな手を握りこぶしにしてアピー

ルする。

「そうかい、それは頼もしい。では、サイネリアくんには練習用のデバイスを用意するから、ウーノくんと魔法の訓練を始めてくれたまえ。崇くんは第二研究室を使いたまえ。ここの隣室だよ。十分な広さもあるし、設備も揃っているはずだけれど、足りないものがあれば言ってくれたまえ。すぐに用意しよう」

そう言つてスカリエッティは椅子から立ち上がった。

「全ては明日からとしよう。今日はもう遅いから、崇くんもサイネリアくんも明日からに備えて今は休んでくれたまえ。ウーノくん、彼らを部屋に案内してあげたまえ」

「かしこまりました、ドクター」

そうして、すべては翌日から動き始めることになった。

スカリエッティの計画も気になるところではあれ、崇は既に翌日からの作業計画を練りながら、ウーノによつてサイネリアと共に居住区へと通路を案内されていくのであった。

第二話・その1

【新暦62年7月24日 ミッドチルダ南部・アルトセイム地方・時の庭園】

「よし、いくよフェイトー」

「うん、いつでもいいよ!」

庭園の広場に少女たちの声が響く。崇の目の前で、庭園の主の娘とサイネリアが遊んでいる。

崇はその光景を庭園の主とともに微笑ましげに眺めていた。

「サイネリア……だったわね、目覚めてからそろそろ二ヶ月だったかしら?」

「ええ、それくらいになりますね」

庭園の主、プレシア・テストロッサとは視線をかわさず、となりで椅子に腰掛けるプレシア同様、崇の目はサイネリアとフェイトを追っていた。

「たった二ヶ月ばかりでフェイトに迫る魔法の才能を示すだなんて、素晴らしい資質だわ」

「ははっ、教師役のウーノの教え方が上手いのでしょうか。私が教えていてはこうはいかなかったでしょう」

「それは私も同じよ。リニスがいなかったら、フェイトの才能を引き出すことは出来なかったわ」

二人の前で、フェイトとサイネリアは互いに魔力弾を撃ちあいそ

れぞれのシールド魔法で防御するという遊びのような訓練を行っていた。それをプレシアの使い魔であるリニスが見守っている。

「それに、どうやらライバルという存在は、フェイトのやる気を刺激してくれているようだわ」

「ライバルであり、友達であるというのは良いことのようなですね。サイネリアはいつもフェイトと会うことを楽しみにしていますよ」

「ふふ、それはフェイトも同じだわ。今度サイネリアが来たらあれをして遊ぶんだ、とか今度は負けない、とかそればかり。母親としては少しさみしいくらいよ」

そう言っただけで微笑むプレシアの表情はとても柔らかい。ちらとそれを確認した崇は、はじめてプレシアと会ったときの様子と比べ、憑き物が落ちたような様子に安堵した。

崇がプレシアとはじめて会ったのは一月程前のことだった。ウーノによるサイネリアへの初歩的な教育——と言っても、基本的なこととは培養槽内での睡眠学習（のようなもの）で終えていたが——を終え、魔法の練習へと移り始めた頃、スカリエッティが突如「プレシア・テストロッサを紹介しよう」と言っただけで半ば拉致同然に二人を連れて時の庭園まで赴いたのだ。

自己紹介を済ませたあと、子供たちふたりはあつという間に意気投合し、庭園内を駆けまわって遊びだし、帰宅するとなったときには互いに絶対にまた会おうねと約束しあうほどの仲になっていた。

一方、崇の方は珍しく共に外出したスカリエッティによってプレシアとリニスに紹介された。プレシアはかつて新型魔導炉の開発に携わったことがあり、その経験を崇のために活かせるだろう、とのことだった。そして使い魔のリニスはプレシアの助手を務める傍ら、フェイトへと魔法を教える教師役を担っていると伝えられた。

はじめて会ったとき、プレシアの表情は深い疲れのためか明らかに困憊しており、とても娘の成長を楽しみにする母親というものはなかった。その理由はこの一ヶ月の間に彼女自身からすでに告げられていた。

「そういえば、サイネリアには自分の生まれについてを伝えてあるのかしら？」

「シリンダーベビーということですか？ ええ、話のついでに伝えてあります。思いの外素直に受け入れてくれましたよ。あなたはフエイトへ伝えていないのですか？」

崇が不思議そうに尋ねると、プレシアの表情は曇った。

「いざ伝えようと思うと、あの娘の……フエイトの悲しむ表情を思い浮かべてしまつて……ダメね、以前の私だったら、躊躇いもなく言えていたようなことなのに……」

「いいではないですか。それだけ、あなたがフエイトのことを思いやっているということですよ。それに、いずれフエイトに本当のことを伝えたとしても、あの子はそれで簡単に折れてしまうような芯の細い子ではありませんよ」

なにしろ、あなたの娘なのですから。そう言つて崇が笑むと、プレシアは、そうねと短く答えて黙ってしまった。しかし、崇はその事に心配を感じることはなかった。プレシアの視線の先にはフエイトがいて、その口許は優しく弧を描いているのだから。

母親たちの見守る前で、フェイトとサイネリアのふたりは、リニス監督のもと遊びを兼ねた魔法の訓練を行っていた。

リニスもまたプレシアから新暦六十五年の春までにフェイトを魔導師として完成させるようにと通達されていた。まだ幼いフェイトを思うリニスにとってはつらい通告のようにも感じていたが、プレシアは頑としてその期限を変えなかった。

リニスからしてみれば、あと三年弱という期間はあまりにも短く、その期限にあわせてフェイトの訓練を組むとすれば年頃の少女として遊び、心を育む時間が眼に見えて削られてしまうのではないかと危惧するところだった。フェイトはプレシアの期待に答えるべくリニスの教える魔法の技術をまるでスポンジが水を吸収するように身につけていったが、リニスにはどこか淋しげな表情をしているようにうに見えていた。

それが解消するきっかけとなったのは、フェイトと魔法の打ち合いをしているサイネリアという少女が現れたことだった。

同年代の少女が現れたことによって、フェイトにはともに笑いあう友達ができた。そして、それと前後してあのいけ好かない笑みを浮かべる医者から何かを言われたのか分からないが、プレシアの表情も柔らかくなっていった。

スカリエッティが何かを言ったにしろ言わないにしろ、使い魔の契約を通してプレシアから伝わってくる感情の波は以前の刺々しいものからだいぶ柔らかいものへと変化している。ちらりと視線をやれば優しい表情でフェイトを見守る様子が見えることに、リニスは未だ信じられないものを見るような思いを受けながら、しかし安堵感も得ていた。

プレシアの変化はフェイトへも良い効果をもたらしていた。今まではどこか寂しさを漂わせていたのが一変して、笑顔をよく見せるようになっていた。それはフェイト自身はもちろん、リニスにも、そしてなによりプレシアにも喜ばしいことだった。

そうやって続く良い変化のサイクルが途切れないよう、リニスは

目の前にいる二人の少女を見守っていくことを心に決めている。

「それじゃあ、そろそろ本格的な訓練を始めましょう」

二人の体が温まってきたことを感じたりリニスは、少女たちに声を掛けるのだった。

今はまず、出来ることを一つ一つやっていきましょう、と心のかで呟いた。

……

……

……

……

……

使い魔は主を守る存在であるとともに、主に依存して生きている。プレシアの使い魔であるリニスは、プレシアの魔力を常に供給している。もし主が死ぬなどして魔力の供給が途切れればそれまで供給されていた魔力の残滓を食いつぶしながら死を待つことになるだろう。

最近のプレシアは体調も良く、高魔力保持者の特徴から外見も若々しい。しかしそれでも結構な――

「リニス、あなた今なにか言ったかしら？」

「い、いえ、なにも言っていないですよ？」

何にせよ女性に年齢の話はタブーなのである。

なにはともあれ今のリニスに消滅のおそれはない。万全の体制でリニスは、プレシアの娘フェイトとこしばらくで仲良くなった友人の助手というサイネリアの魔法の特訓を行っている。

フェイトはリニスが看ているとき意外にも自分で進んで魔法の勉強をしていることが多い。勉強内容が基礎から応用へ移っても基礎

をおろそかにすることなく、しっかりと頭に入れていることが行動の端々で確認できる。

それに、フェイトは魔力を電気に変換するという特異な資質を有している。これについても、フェイトは自分で考えて何に使えるかを模索しようとしている。向学精神が旺盛なのはリニスにとっても嬉しいことだ。

対するサイネリアも、ウーノによって基礎をしっかりと叩き込まれているらしく、どのような魔法も平均的に扱ってみせる。そのなかでも飛び抜けているのは射撃魔法だろう。単発、連射、砲撃と見事に使い分けて見せるのは、才能の伸びを感じさせる。

「そろそろですね」

「きょう」

サイネリアが変幻自在に放つ射撃魔法を時に防御し、時に回避し続けるフェイトだったが、反撃の糸口がつかめずにいた。そして、なかなか反撃に転じられないまま、サイネリアの魔法に眉間を弾かれてその場にうずくまった。

第二話・その1（後書き）

フェイト登場。

第二話・その2

【新暦62年7月30日 ミッドチルダ南部・アルトセイム地方・時の庭園・研究室】

『リニス、先日はありがとうございます。おかげで研究が捗ります』

空間ディスプレイ越しにリニスは崇と通話していた。

「いえ、こちらこそ。あの後フェイトは頑張って魔法の練習をしますよ……って、そちらのお礼ですか？」

リニスは呆れたように眉をゆがませた。モニター越しの崇は何がおかしいのかわからないとばかりに一瞬首をかしげたが、ああ、と一つ頷いて納得した。

『そうでした、先日はサイネリアの魔法も見てくれてありがとうございます』

「ええ、どういたしまして。まったく、あなたは頭が良いのにどこか抜けてるところがありますね」

『そうですか？ そんなことはないと思いますが……』

そう答える崇に、リニスは今度こそ呆れて溜め息をついた。

「それで、研究の方はいかがですか？ プレシアがかつて携わった魔導炉と、旧式のものから最新のものまで含めた手に入る限りの魔導炉のデータと、現在私が開発中のバルディッシュのデータを送りましたか……」

スパツと話題を変えたりニスに合わせて、祟も思考を切り替えてくれた。

『そうですね、現在は私が開発した魔導炉の問題点の洗い出しを行っています。それももう終わりますし、そうしたら新型魔導炉の設計に移ろうと思います。人の背に負えるくらいの小型化は難産かと思いますが、まあなんとかなるでしょう』

「なんとかなるのですか……。本当に簡単にやっつてのける気がして恐ろしいですね……」

『ははっ、まあ、完全に物にするまでには一年程度の時間は必要でしょう。完成後もサイネリアとのすり合わせも行わねばなりません……。そう考えると、やはり二年程度の時間はかかるでしょうね』
「新型魔導炉の開発を一年というのも驚異ですね。全く、呆れ返って言葉ありませんよ。……。あ、そういえばデバイスの方はいかがですか？」

リニスはなにやら考える表情を浮かべたが、ふと話題を転換した。

『ええ、基本コンセプトは決まっていますのでそこらは比較的順調ですね。バルディッシュのデータと一緒に送っていただいたインテリジェントデバイスの思考プログラムはなかなか興味深く拝見させていただきました』

「そうですね、役に立てたようで喜ばしい限りです」

リニスは嬉しそうに笑った。

はじめて会って以来、ふたりはよく互いの研究のことやそれぞれの少女たちについての話を交わすことが多かった。時に互いの研究室を行き来し合い、交流は盛んだった。

『ある程度形になったら、一度見ていただきたいですね』

そう言われた時も、リニスは迷うことなく頷いていた。

「ええ、もちろんです。でも、あなたがいう“ある程度”って完成直前というイメージが強いですね」

『おや、間違っていないですよ。ま、いいではないですか』

「構いませんけどね。……っと、そういえば、次はいつごろいらつしやいますか？ フェイトがサイネリアに会いたがっているんですよ」

話題を転換したリニスだったが、その視線はぜか泳いでいる。

『そうですね、サイネリアもフェイトに会いたがっていますし、できるだけ間を置かずに連れて行ってあげたいのですが、早くて来週末というところでしょうかね』

間も置かず告げられた崇の言葉に、リニスはわずかに沈んだ表情を見せる。しかしその原因に崇が気付くことはなく、リニスに二言三言告げ、次回の来訪を約束してから通信は切られた。

「はあ」

「溜息をつくと幸せが逃げちゃうんだよ、リニス」

「ひゃっ、え？ あ、フェイトですか……驚かさないでください」

驚いて全身を緊張させたリニスは、椅子に座って足をぶらぶらさせながらにや付いているフェイトの姿を確認して肩の力を抜いた。

「崇お兄ちゃんもにぶちん？だね」

「まあ、フェイト、そんな言葉どこで習ったんです？」

「アルフが言ってたの。でも、週末になって崇お兄ちゃんが来るの楽しみだね？」

「ええ、それはまあ……って、こら、フェイト、何を言わせるんです！」

「あははっ、リニスが怒った」

片手をふりあげて怒っているポーズを見せるリニスを笑ってフェイトは椅子を飛び降りると駆け出した。

「まちなさい！」

それを追いかけてリニスはしばらく研究室の中をパタパタ走りまわるのだった。

【新暦62年7月30日 スカリエッティの研究所・訓練施設】

通信を終えた崇は訓練施設へと足を伸ばした。いつもならここでウーノがサイネリアに魔法の訓練を付けているはずだった。

「お、やっていますね」

案の定、訓練施設の扉をくぐるとサイネリアとウーノの姿があった。

訓練施設は、モニター室と訓練室に分かれている。モニター室で

は訓練室内に出現させるホログラムの設定を変更したり、訓練内容を記録したりとおおよそ訓練に必要そうなことならひと通り出来るようになってる。

訓練室は当然魔法の練習を行えるようになってる。耐魔法壁で囲まれた施設は強力な魔法にも耐えることが出来るようになっており、外部の岩盤も合わせて堅固な防御力を備えているという。

二人の姿は訓練室の中にあつた。崇はモニター室で設定項目をいじくって、変更を適用する前にマイクのスイッチを入れた。

「ふたりとも、お疲れ様です」

「あ、マスター！」

「崇さま。見学ですか？」

崇が声をかけると、二人から返答が返ってくる。訓練室とモニター室はそれぞれの音声が届くようになってる。崇はそのまま訓練内容の変更を告げた。

「サイネリア用のデバイスを製作する参考に使いたいと思います。少々飛行魔法と射撃魔法を見せてください。出来ますね？」

「うん、任せてくださいマスター！」

「良い返事ですね。では、訓練プログラムを起動させます。ウーノはこちらへ戻ってください」

「ええ、わかりました」

崇は、ウーノがモニター室へと入ってくるのを待ってから、訓練プログラムを起動させた。

……

……

……

……

……

訓練室に残ったサイネリアは、自身の状態を再確認した。いつも訓練を見てくれているウーノから、自身のコンディションは常に把握しておくことが大切だと聞かされていたからだ。少しでもコンディションが違えば戦闘行動に何らかの支障が出る、と口を酸っぱく聞かされていた。

「コンディションは良好」

まずは杖。スカリエッティ博士から渡された何の変哲もないストレージデバイスだ。ミッドチルダ式の魔法様式に最適化されているため、射撃魔法への適性が高い。それに練習用ということもあって防御・捕獲・結界・補助とひと通りの魔法プログラムがインプットされている。

まだ専用の杖がないサイネリアに取って、今はこの杖が自分の杖だった。

続いて確認するのはバリアジャケット。はじめてもらって以来頻繁に着るお気に入りの一着をベースにしたすみれ色の防護服。両肩と袖口に意匠替わりのプロテクターがあしらわれているのが特徴だ。こればかりははじめて構築したときにサイネリア自身が決めたお気に入りの一着だ。

そして最後に自身。直前まで行っていた訓練の疲れはない。魔力

の消耗も、まだ本格的な訓練に映る前だったので十分に残されている。崇がどんな訓練プログラムを流すかわからないものの、充分対応は可能だと考えられる。

「よし」

サイネリアは杖を握る手に力を込めた。

同時に、崇が起動させた訓練プログラムが訓練室の風景を変貌させた。

第二話・その2（後書き）

サイネリアのお陰でフェイトの性格も微妙に変わってます。

第二話・その3

【新暦62年7月30日 スカリエッティの研究所・訓練施設】

『三つ……四つ、次!』

訓練施設に投影された空中で、サイネリアは縦横無尽に空を飛翔して、次々に現れるターゲットを射撃魔法で撃ち抜いていた。時に規則的に、時に不規則に現れる的を確実に撃ち抜いてスコアを稼いでいた。

『六つ……七、八い、九ッ!』

三つまとめて出てきた的は瞬時に三発撃ち放って確実に仕留める。

『うわっ、たつくさん。そおーれ!』

突如周囲を囲むように現れた複数の的は急制動を駆けつつ身体を回転させながらの砲撃でしのぎ、すぐさまその場を離脱する。

崇はその様子をモニター室で見ていた。

「知ってはいましたが、本当に射撃の腕は確かですね」

崇は傍らに立つウーノに確認する。

「ええ。一見ふざけたような挙動を取るときもありますが、それもフェイントになっています」

普段は対人戦を想定させていますから、とウーノは答える。その答えを聞いて崇は一つ頷き、手元の操作パネルを叩き設定を変更すると、サイネリアに告げることなく変更を適用した。

順調にスコアを稼いでいたサイネリアだが、出現した人形の目的が攻撃のエフェクトを放ってきたのを見て、一旦上空へと避難する。

『対人戦ってわけですね、マスター』

そのままトンボ帰りの要領で宙返りすると、飛来する攻撃をするりと避け、的の中心をたがわず撃ちぬく。

単体、複数。固定、移動と様々なパターンが次から次へと出現してはサイネリアに撃ち落とされるのを繰り返していった。

「ふむ、旋回はいまいち大回りですね」

「ええ、まあ高速で飛翔していると自然そうなりますね。それでも彼女は小回りな方ですが」

そして時には先程見せたような急制動からの軌道をとってみせたりもする。

「なるほど、空戦に関してはいいセンスを持っているようですね」

「はい、それは確かです」

「よし、よく分かりました。では、そろそろプログラムのレベルを上げましょうか」

そう告げると、崇はパネルを操作して再び設定を変更した。すると、それまでは見事な起動を描いていたサイネリアの動きが見るからに鈍くなった。

サイネリアは思いの外苦戦していた。

別にそれまではただのエフェクトだったものが、実態を持った生身の人間として標的が現れたことに戸惑ったわけではなかった。魔導師となれば遅かれ早かれ対人戦を経験することになるとウーノに諭され対人戦も何度となく行っていたから、今さらその事で躊躇する気持ちはサイネリアにはなかった。

事実手古摺りながらも攻撃してきた敵対者を近接射撃で撃ち落とすところだった。

「くっつ、なんだってこんなにキッツイの？」

しかしサイネリアの表情は晴れなかった。だが、その辛さの理由を考えるまもなく、サイネリアの背後に迫った影が射撃魔法を打ち込んでくる。

それを螺旋軌道を描いて回避するが、それだけでは敵を引き剥がすことは出来ない。

背後についた敵が誘導型の魔法を四、五発打ち込んでくる。旋回して振り切ろうとしたところに直射魔法が打ち込まれ、危うくバリアジャケットの端をかする。さつきから何度となく同じ手を食らっている。

背後からは誘導魔法が追尾し、それを振り切ろうと旋回したところを射撃で撃ち落とすというシンプルな戦術に、サイネリアは翻弄されていた。

力で押し切れない相手ではないが、サイネリアはスマートにそこへ持っていく方法を見出せないでいた。

「何か、きつと何か気づいてないことがあるのよね」

今また二人の敵魔導師に負われる形になったサイネリアは、高速で飛翔してもなお背後を追尾し、時に誘導魔法をばらまいて威嚇を加えてくる敵の背後を取るためにとんぼ返りをした。

「えっ、ちよつとちよつと！」

しかし、背後を取ったと思ったサイネリアの前にはまっすぐに自身へと砲身に向けた魔導師が一人立っていた。とつさに後ろを振り向くと、先程追いかけて来た内の片方が、罨にかかったうさぎに止めを刺すため、誘導魔法を解き放ったところだった。

げ、とあからさまに表情を歪めたサイネリアは、同時に思考の端っこで先程自問した問の答えを見出すことに成功した。

「分かった！」

必死の極限に追い込まれたサイネリアは才能の片鱗を見せた。

すぐさま誘導弾に背に向けたサイネリアは、加速を加えて前方に飛んだ。前方にいる魔導師は迷うことなく魔法を発射し、火線はサイネリアを襲う。

だがサイネリアは火線を舐めるように飛翔し、迷わず前方の魔導師の横を駆け抜ける。それと同時に撃破の判定を受けた魔導師の身体が弾けて消えた。

サイネリアはそれを確かめることなく急停止をかけ、上空へと垂直に飛び上がった。サイネリアが急停止した場所を追跡対象を一時的に見失った誘導弾が過ぎていった。

飛び上がりながら背後へ振り向いたサイネリアは、再度射撃形態へと変形させたデバイスを残った魔導師に向け、魔法を発射した。魔法は、敵魔導師の胸に吸い込まれるように突き刺さった。

『よし、そこまでです』

……

……

……

……

……

「何か掴むことができたようですね」

モニター室へと入ってきたサイネリアを、崇は出迎えた。

「はい、マスター」

「私ははじめ、地球の戦闘機を模した動きをモブに行わせました」

崇は「既に分かっていることだとは思いますが」と断った上でサイネリアに話し始めた。

「サイネリア。あなたはその動きに釣られ、自然と同じような動きをするようになっていました。それまでの非移動型ターゲットに出来ていた自由な動きが失われていたのです」

サイネリアは黙って崇の話を聞いている。その表情には憂いはなく、自らが確認したことの正体を知りたいと興味が見て取れた。

「たしかに飛行中の魔導師は一個の飛翔体ですが、それは戦闘機ではありません。その事にあなたは土壇場で気付くことができた。すれ違い様の斬撃、見事でした。それまでのように射撃にだけ傾倒していては思いつけない発想です」

最後の瞬間、正面の魔導師とすれ違ったときサイネリアは杖の先端に魔力の塊を発生させ、すれ違いざまに一撃を加えていたのだ。その一撃の僅かな抵抗を足がかりに急停止し、最後の一撃へとつなげた。

「その一連の連携も見事でした。空戦魔導師の自由度を証明するかなのような攻撃でしたよ」

そう言い、サイネリアの頭に手を載せて微笑んで、ひとつ頷いて見せる。少し俯いていたサイネリアは、そうされたことで褒められたことに気付き顔をあげた。

「私もあなたのデバイスを作る際の着想を得られました。完成までの間、ウーノの言葉をよく聞き、しっかりと腕を磨きなさい」
「は、はい！」

サイネリアは決意を新たに頷いた。

第二話・その4

【新暦62年7月30日 スカリエッツィの研究所・第二研究室】

サイネリアの訓練を見て得た着想をもとに、崇はデバイスの設計を行っていた。

現在ミッドチルダで主流となっている魔法は遠距離攻撃が主体になっている。それは個人の技量で戦闘を左右する英雄の時代から、単純な数の暴力で殲滅する軍事の時代に变化したことを端的に示す。古代ベルカと呼ばれた時代は近接戦闘用のデバイスが主流となり、武器に魔力を乗せて闘うというのが基本スタイルだったということもあり、血で血を洗うという時代だったようだ。それが理由だったのかは定かでないが、大きな戦乱の時代をもたらした末ベルカ時代は終焉を迎えた。

そして新たに主流となったミッドチルダ式魔法は、極力人死がないよう方策を練られている。その最たる例が“非殺傷設定”だ。デバイスというマシンを通すことによって魔力が肉体を傷つける作用を緩和する。これにより、対象を肉体的には傷つけず撃破・捕縛することが可能となる。

古代ベルカ時代の戦乱以降、貴重な人的資源となった魔導師を極力失わないために取られるようになった方策だった。

「私としては、魔力だとか魔法だとかよりこちらのほうが摩訶不思議ですがね」

崇はデバイスの基本フレームを構築しながら読んでいた魔法関連の電子書籍の説明文に首をかしげた。

「まあ、精神に作用させると理解すれば早いのですが、それにしても……」

そう呟きながらも、作業を行なう手は止めない。

ミッド式の魔法が主流になるに連れ、デバイスは個人の長所に合わせたワンオフ機という考えも薄れる傾向が現れた。時空管理局の警察機能化と相まって、大量生産品の普及が行われた。

誰が使っても一定の性能を示すことが出来、オールマイティな性能を出すことが可能な量産品は、軍事的な側面も見せる管理局に取って都合のよいものだった。一人の英雄より百人の一般兵という訳だ。

それでも、個々人の魔力資質は戦力の差になりうることは確かだ。Dランクは束になればCランク、Bランクに勝つことも可能だが、Aランクに勝つことは難しい。技術があっても力技でひっくり返されるのだという。それ以上のランクが相手では言わずもがなだ。

ワンオフ機を組織が供与しようとしても、個人で考えれば支給品のデバイスの最適化から始まり、最終的に自らの長所に最も適したデバイスを得たいという欲求は依然高かった。そういったことも、高ランク魔導師の強さの秘訣とも言われる。

そのため高ランク魔導師は重宝がられることとなり、自然と功績を立てる機会も多くなり、出世も早くなる。厳然とした格差だが、こればかりは魔法を主力に据える組織の宿命と言えるだろう。

「私のランクは現状B止まり。訓練次第で少しは伸びる余地はあるらしいとはいえ、どうあがいてもサイネリアやフェイトに勝つことは難しい……と、ウーノは言っていました……」

崇は口角を釣り上げる。

「ふむ、サイネリアの分だけでは詰まらないですね、私の分も作り

ますか」

崇は軽く口にする、思考を分割して自分専用デバイスの設計を練り始めるのだった。

【新暦62年8月2日 スカリエッティの研究所・第一研究室】

「サイネリアくんは良くやっているようだね」

「はい、ドクター。しかし戦闘訓練に関してはいささか私では頭打ちになってきました」

ウーノは淡々と詳報を伝える。

ここ二ヶ月ほどサイネリアの戦闘訓練を行なってきたウーノだったが、そもそもウーノは戦闘を行なうことを想定せずに製造されているので、基本的なことを教えて以後は目覚しい勢いで成長しているサイネリアに教えることがだんだんなくなってきていた。

正直なところ、リニスという科学者としてかなりの知識を納めながら戦闘も教えられる教師役がいなければ、もっと深刻に悩んでいたかもしれない。そういった意味ではウーノはリニスのことをありがたく思うと同時に尊敬していた。

「とはいえ、そろそろ訓練プログラムをメインに切り替えるのだから?」

「ええ、まあ、そうですね」

「戦闘型のトーレを近々起動させる予定だけれど、戦闘技能の習熟

には時間もかかるよ。とても目覚めさせてすぐにサイネリアくんの訓練教官に据えるようなことは出来まいね」

しばらくはプレシア女史の使い魔くんと“Fの結晶”に頑張ってもらうほがあるまい、とスカリエッツィは答える。

「ドゥーエは呼び戻すわけにも行きませんしね」

「ああ、彼女はまだしばらくはムリだね。新暦65年に第97管理外世界に関われる位置にいてもらうために、彼女には少々ムリをしてもらっているからね」

「はい、承知しています」

ウーノが頷いたのを確認して、スカリエッツィは話題を変える。

「各方面は今の所変わりないかな？」

「はい、特に異常なく状況は推移しています。概ねドクターの想定通りとなっております」

「そうかい、それは結構。まあ、まだ時間はあるのだから、多少の変化は問題ない」

はい、と頷いてウーノは沈黙する。しかし、何か考えついたことがあるのか、ドクター、と呼びかけた。

「なんだね」

ウーノに顔を向けることなく空間ディスプレイにキーボードでコマンドを打ち込みながら、スカリエッツィは先を促す。

「第97管理外世界のことですが、かねてより、明らかに異世界人である私が偵察を兼ね街を歩き回るのはやや無理があると感じてい

ました。それに、要捜査対象の海鳴市域は、意外にも異物の侵入に敏感です」

「そうだねえ。それに、例のものもあるはずだからね」

「はい。ですので、ここは私ではなく、もとからの街に暮らしていた崇様に街の捜索を行っていたただくのはいかがでしょうか」
「なるほど」

とスカリエッツィは頷く。

「もとよりあの街に住んでいたものなら、街の中を、少しばかりそれまでの行動範囲から外れるほど歩いて回ったとしても怪しまれる公算は低いというわけだね」

スカリエッツィは再び頷いて考えるように沈黙した。その間も手は休むことなくキーボードをタイプし続けている。

「そうだね、その案でいこうか。とはいえ、崇くんも多忙な身だからね、二年後をめどに本格的に開始してもらうことにしようじゃないか。どうせ例のものは発動するまで所在が判明しにくいのだし」
「かしこまりました、ドクター。円滑に活動を開始できるよう、準備は万全に整えておきます」

ウーノはそう言い残して研究室を出て行った。

あとに残ったスカリエッツィは、小さな声で呟く。

「とはいえ、あの街は外部からの侵入者には敏感でも、それを力尽くでどうにかする気はないようなんだけどね。ウーノくん、それもこれもサイネリアくんのため、なのかな……？」

変わったね、と最後に彼は楽しげに笑い声をたてるのだった。

第三話・その1

【新暦62年8月7日 ミッドチルダ南部・アルトセイム地方・時の庭園】

「調子はいかがですか？」

サイネリアを連れ、約束通り時の庭園を訪れた崇にリニスは尋ねる。

「悪くはありませんよ。あの後私のデバイスも開発を開始しましたし」

「おや、崇用のですか」

「ええ、サイネリアのものを作っていたら興が乗ったもので。とはいえ、こちらは片手間ですから、大したものは出来ませんよ」

崇はそう言ったが、リニスは素直にそうとは受け取らなかったよ
うで、おかしそうに笑った。

「なんです？」

「いいえ、あなたも冗談をいうのだなあ、と思ひまして」

「冗談？ 何のことですか」

「いえいえ、なんでもないんですよ」

そう言ったりニスだったが、やはりニコニコ笑っている。崇は憮然とした表情で話題を変えた。

「デバイスといえば、あなたの方はどうなのですか」

「ええ、順調ですよ。フェイトはスピードを活かした一撃必殺が主力になるでしょうからね、それを念頭において製作中です」

創作意欲が刺激されます。とリニスは燃え上がっている。

「それに、ちゃんと金に糸目は付けないってプレシアから言質をとってありますし」

「……なるほど、抜け目ないですね」

「プレシアも人の親、ということではないでしょうか。万一のことがないようにと念を押されましたから」

リニスは嬉しそうに目を細めて、庭園で遊んでいるフェイトとサイネリアに目をやった。

……

……

……

……

……

「でね、カーブを描きながら飛んでって、カクつと曲がるのよ。そしたら敵は一瞬びっくりして止まるでしょ？ だからそこをずばーんと撃つわけ」

庭園の芝生に座り込んで、なにやらサイネリアが身振り手振りを

しながらフェイトに何かを熱心に話しかけている。しかしフェイトはちんぷんかんぷんなように首を傾げている。

「だからね、ビューンと来て、カクつとやってどーん！　なの」

「びゅーってして、がつくりきてどどーん？」

「ちーがーうー」

もーなんでーとサイネリアは頭をかきむしる。

それを見てフェイトは細い顎に人差し指を当てて首を傾げると、それを見たサイネリアが呟く。

「くっそう、かわいいなあ」

フェイトは瞬時に顔を真赤にすると、わたわたと両手を振って照れをこまかし始める。

「も、もう、サイネリアだって可愛いよ！」

ひどく照れたフェイトはサイネリアに飛びかかった。

フェイトを受け止めようとしたサイネリアだったが、バランスを崩してそのまま纏れ合って芝生の上に倒れこんだ。

「——……ぷっ、ふふ、あはははっ」

始めに吹き出したのはどちらだったのか。二人はそろって笑い出すと、芝生の上で抱き合ったままゴロゴロ転がりながら笑い続ける。

「なにをやっているのやら」

「ふたりとも可愛いじゃありませんか」

二人の保護者の声が聞こえても、二人は構わず笑い続けるのだった。

少女たちが楽しげにじゃれあっているのを、崇たちは変わらず眺めていた。

「それにしても、すこし羨ましいですね」

「え？ サイネリアとじゃれあうのがですか？」

崇の呟きに、リニスが眉を寄せる。

「違いますよ。サイネリアは、私と話すときはあんなに感情を表に出しませんから」

「ああ、そういうことですか」

するとリニスは何がおかしいのかくすくすと笑う。それに今度は崇が眉をゆがませる。

「何がおかしいのです？」

「子供ですもの、親の前ではいい子でいたいんですよ。それに……」
「それに？」

「いえ。あなた自身に気付いてほしいこともあるんですよ」

リニスは手を後ろに組んで顎を少し上げて首を傾げると、パチリとウィンクした。

「ふむ、そうですか……」

崇はチラとリニスをみただけで、視線をすぐに少女たちに戻して

しまった。

「まあ、遅かれ早かれ気付くでしょうけど」

トリニスには彼に聞こえないようにささやいた。崇の視線はずっとサイネリアを追っていたことにリニスは気づいていた。気づいていないのは本人だけだった……。

第三話・その1（後書き）

今回はちよつと短め。

第三話・その2

【新暦62年12月12日 スカリエッティの研究所・第三研究室】

「まさか半年で本当にここまで来るとは思わなかったよ」

空間にいくつかのスクリーンが浮かんでいる。スクリーンには数種の設計図が書かれている。デバイスのものが三つ、魔導炉のものが一つ。それは崇がここ半年あまり制作を続けているものだ。

「どのデバイスも実にスマートだ。斬るため、撃つため、そして飛ぶため。一つの目的を達成するためにこれ以上の効率はないというほど収斂されている」

「そんなに褒めてもらえると嬉しいですが、大したことではありませんよ」

もつと時間をかければ、それ以上のものが出来るだろう、と崇はいう。

「とはいえ、時間をかけていないこれらが不出来というわけではありませんが」

と崇はこともなげに言う。スカリエッティはそれを満足そうに受け取る。

「結構なことだ。それにもう一つ、この魔導炉、これは……感嘆の一言に尽きる」

崇が地球で開発した魔導炉を発展改良した、その魔導炉は既存の魔導炉よりもはるかに小さかった。しかしスペックは既存のものと同等か、それ以上が出ると想定されている。

オーバーテクノロジーも真つ青な性能だが、崇は大したこともなさそうに答える。

「しかし、背負うことも容易となったのは良いのですが、この世界では空を飛ぶには魔法を使えばことがすむのが残念でなりません」
「たしか、はじめはこれをサイネリアくに背負わせる予定だったのだね？」

「ええ、魔導炉で得た推力を方向転換に用いれば、変幻自在に空中を飛翔できると考えていましたから。ですがね、サイネリアの実力は私の想像を上回っていました。結局、その案は三号機に引き継ぎですよ」

崇はここ半年のサイネリアの成長を思う。サイネリアは、大方の予想を裏切るように力を付けていた。魔力量はもとより多かったものがAAAに届かんばかりになり、空中戦は魔導師ランク以上の實力を示し、空を制するかのよう成長を見せていた。同じく空戦・地上戦問わずスピードを自身の長所としているフェイトをテクニクと、時にスピードで凌駕することさえみせるようになっていた。それにつられてフェイトも自身の實力を開花させつつあり、二人は良きライバルとして互いに高めあっている。サイネリアとフェイトは半年間で最良の関係を築いたというべきだろう。

「とりあえず、サイネリアのデバイスに組み込む方法を取ることにしました。彼女が必要だと思う時が来れば、バリアジャケットに組み込む時もあるかもしれません。それと、あなたが提案する……ガジェット・ドローンですか？ その動力源にでもしましょうか」
「いや」

だがスカリエッツィは首を振る。崇はそれを意外に思う。

「おや、意外かね？ あれは消耗品、つまりガラクタだよ。やるとしてもせめて戦闘経験を無駄にしないためのデータの集積くらいだろう」

「ふむ、しかし、そうすると魔導炉は作る意味が無くなってしまいますね」

「いや、そんなことはないよ。それよりも君の魔導炉のおかげで管理局の地上本部にもいい顔ができそうだし、それに面白いことを思いついた」

そう言いつと、スカリエッツィは新たにスクリーンを開き、そこに設計図を表示させた。

「ほう……これは」

「どうだね？ 魔導炉の正しい使い方とは、こういうことをいうのだよ」

「なるほど、これは……しかし、作るにはずいぶんと時間がかかりそうですよ？」

崇は感心しながらも尋ねる。スカリエッツィは嬉しそうに笑みを浮かべた。

「出来ない、と言わないでくれて嬉しいよ。これは別段急ぐ計画ではない、十年……早くて八年程度で完成すれば御の字だ」

「そうですか。……この計画、プレシアも？」

プレシアは自身の研究に骨身を惜しまず没頭していた期間に体調を大きく崩しており、最近は持ち直したとはいえ、症状は小康状態

と言ったほうがいいと医者でもあるスカリエッティから聞かされていた。

「ああ、一枚噛んでいる。もっとも、プレシア女史が最期まで開れるかは……いや、この話はやめておこう」

「ええ、それはたしかに」

プレシアは、崇はもちろんジェイルよりも長く研究を続けている技術者としての腕前は折り紙付きだ。本人の最近の悩みは、小皺が増えてきたことだとか。

しかしそんなことを、本人の前でうつかり口にしようものならSランク級の雷撃魔法が飛んで来るし、いない所で口にしたとしても背筋を寒気が二度三度と駆け巡るのだから、言葉の端にすら載せるのははばかられる。

「プレシアといえば、あなた、彼女の研究にもなにか噛んでいるのだと伺いましたよ」

「おや、そこまで信頼関係を築けたのかい？　なら話してしまおうか」

スカリエッティは、そういうとすべてのスクリーンを閉じ、改めて一つの空間スクリーンを表示させた。

「う、これは……」

スクリーンに映されたのは、どこかの研究室。そしてその中央に

は以前サイネリアが入れられていたようなポッドが安置されていた。ポッドの内部はやはり同じように液体に満たされている。内部にはやはり、少女の姿がある。しかし、その少女はどこか生命力を感じさせずにいる。

そして、その少女はあまりに似すぎている。

「……フェイト？ いや、しかしこれは……」

「いや、アリシアだよ。アリシア・テストロッサ。約二十数年前に亡くなったとされる、プレシア・テストロッサの娘さ」

『——スカリエッティなの？』

スクリーンから、プレシア・テストロッサの声が流れた。続いて、スクリーンの死角から、プレシアが姿を現す。彼女はスカリエッティの姿を見てなにかを言おうとして口を開けたものの、隣に立つ崇の姿を認めて、静かに口を閉じた。

『……そう、崇もいるの。まあ、いずれ話すつもりでいたからいいわ。スカリエッティ、私から話すわ』

プレシアの言葉に、スカリエッティは意外そうな表情を浮かべる。

「いいのかい？」

『いいのよ。崇には聞いておいてもらいたいのだからね』

そう言っ、プレシアはスクリーンに背を向けて、ポットへと歩き出す。

『この子はアリシア。私の娘よ。二十三年前に死んだ……』

プレシアの寂しげな声が響く。

『——当時私は新型魔導炉ヒュウドラの開発に携わっていた。完成が目前に迫った頃、上から起動実験が命ぜられた。けれど、その時点での起動は危険が予想された』

崇には、“ヒュウドラ”という名前には聞き覚えがあった。たしか、リニスから渡された資料にその名が書かれていたのだ。

『私は所長に具申したわ。まだ起動実験は無理がある、暴走の危険がある、って。けれど、所長はこれは本社からの命令、の一点張り。しかも実験当日になって何も知らない本社の技術スタッフがやってきて、私たちのことを蚊帳の外に置いて勝手をやり始めた』

プレシアの声にはひどい悔いが滲み出ていた。

『案の定ヒュウドラは暴走し、周辺に膨大な魔力素を放出した。当時幼く、魔力適性もそれほど高くなかったアリシアは、急性魔力中毒にかかって……』

後ろを向いたままのプレシアの肩が震えている。ポッドにすぎるように抱きついたプレシアだが、泣いているのかもしれない。

『私はそれを認められず、アリシアをこうやって生かし続けている。そう、アリシアはかろうじて生きているの。意外かもしれないけれど、アリシアは生き続けているのよ』

そうは言うが、ポッドの中に浮かぶアリシアの姿は、とても年齢相応には見えない。どう見ても現在のフェイトと同じくらいか、それより幼いくらいに見える。

「どうやら、身体はほとんど死んでいても、心というか……確か、君の世界では“魂”という概念があったかな、そういった部分が生きているようなのだよ」

生命科学者泣かせだね。とスカリエツティが補足する。

門外漢の崇でさえ、魂のことは理解できる。生物は魂魄によって構成されているという概念。それは精神や心と言った部分の“魂”と肉体である“魄”により人間はもちろん、生物は成り立っており、死ぬと魄は滅ぶが魂は再び肉体に宿るという考え方だ。

崇は眉をピクリと震わせた。

「意外かもしれないが、それは純然たる事実だよ。そしてプレシアは、魂の器を生み出すことを決めた」

『初めは、アリシアの記憶を受け継ぐ、アリシアのクローンを生み出すことを考えただけだった。けれど、それもすぐに違うのだと思いついた。アリシアの記憶をそっくり受け継いでいても、それはアリシアではない、別のものだ』

プレシアは、間違い無く天才だ。母の愛とか、執念という言葉で片付けることも可能だが、専門外の生命科学に手を出して、なお成果を得ることが可能だったプレシアは、紛れもない天才なのだろう。そして、それゆえに自らの行いの破綻に気付いてしまった。

『もっとも、それを気付かせてくれたのはフェイトと——あなたのところのサイネリアだったのだけれど。……ちなみに、その計画の名前はプロジェクト・フェイトと言ったのよ』

「……まさか」

「そう。フェイトは、プレシアのそれまでの研究の集大成というべき完成体だった。しかし、そのフェイトでさえ、アリシアとの些細

な違いが生まれた」

『初めのうち、私は失意にまみれ絶望していたわ。長年かけて研究してきたことが、失敗という結果しか生まないのだからね』

それが魂の違いということだろう、と崇は思ったが言葉にはしない。まだ話は続く。

『その頃、私はそのいけ好かない医者と出会ったのよ』
「相変わらず、ご挨拶だね」

二人は笑いあう。二人にとってこれくらいはもう拘ることではないようだ。

「プレシアの行っていた計画、人造魔導師製造計画——プロジェクトF・A・T・E・のね、その基礎理論を築いたのは僕なんだよ」
『おかげで、アリシアを目覚めさせるめどが立ったわ』

気持ちが楽になったのは確かね、とプレシアはいう。その結果、アリシアとの僅かな違いに苛立って遠ざけていたフェイトにも、自然に接することができるようになっていった。プレシアは嬉しそうにいう。

「ま、そのために時間が必要というわけだ。そして、その期限は三年後……すなわち、新暦六十五年なのだよ」

プレシアに引き続いて、スカリエッティが話し始めた。

第三話・その2（後書き）

ただ、アリシアを甦らせるかは未定です。

第三話・その3

【新暦62年12月12日 スカリエッティの研究所・第三研究室】

「アルハザードという世界がある」

崇は、スカリエッティの言葉に首を傾げる。

「その世界はるか昔に滅び、次元の狭間——虚数空間の中に沈んでいったと伝えられているのだがね、実際はまだ虚数空間の中に存在している」

「ほう、それで？」

崇は先を促す。まだそれがどう繋がっていくのかわからなかったが、いずれ一本の系につながるとすれば、興味深い話に思えた。

「その世界はかつて死者の再生という禁忌に手を染めたのだが……意外なことに成功を収めてしまった」

スカリエッティはあっさりと言うが、崇からすればそれは驚くべきことだ。死者の蘇生など、地球では未だ可能性すら発見されていないお伽話の技術だった。

「しかし、アルハザードはその技術を秘匿した。感情的なものもあったのだろうけれども、人のとる決断としては、まあ当然だね」

『ええ、当然ね』

「当然ですね」

死者蘇生など明らかにオーバーテクノロジーだ。その技術が流出すれば、世界は新たなステップを二段も三段も踏み抜くことだったろう。アルハザードという世界が取った選択は正しいものに思えた。

「そしてその技術を、きたるべき時が来るまで秘匿するため、アルハザードは自ら虚数空間の中に沈んだ」

「そんなことをして平気なのですか？」

『虚数空間はすべての魔法が使用できなくなるだけで、それ以外は通常空間と何ら変わらない物理法則に従っていることに違いはないの。行き方はあるわ』

普通の魔導師は魔法が使えないことに絶望を感じるだろう。しかし、そういう発想で止まらないところがプレシアやスカリエッティの彼らたりるところだろう。

「まあ、そういうわけだよ。三年後、新暦六十五年の春にプレシアには虚数空間を渡ってアルハザードへと向かってもらう」

「そんなことが出来るのですか」

「片道分の準備は進めているよ。しかし、まずは通常空間を引き裂いて虚数空間を開かなければならないんだよ」

「ほう、もちろんその方策が……」

「ある。今は明かせないけどね。時が来れば分かるよ。そしてそれが六十五年の春なのさ」

「早めることはできないのですか？」

「作戦を早めることも可能ではないけれど、それもこれもフェイトくんとサイネリアくんの仕上がり次第だね」

『それに、スカリエッティの言葉を信じるなら、三年後になってようやくすべての準備が整うのだそうよ』

「ふむ……我々以外にもこの計画に関わる要素があるということですか」

「そういうことだね」

「そうですか……わかりました。ところで、このことをフェイトには？」

「壮大な計画だが、そうするとフェイトがあとに残されることになる。それについて、プレシアはどう思っているのだろうか。」

『教えていないわ』

崇の問いかけに対する、プレシアの返答は短かった。

「崇くんもサイネリアくんにこのことを教えないほうがいい」

「知りながら知らないふりをするのはつらいから、ですか」

「ん？ ああ、それもあるがね。我々——というより、主に僕は彼女たちを計画の駒として利用する。けれど、それについては彼女たち自身に答えを出してもらいたいと思っているんだよ。こちらから計画を告げれば、彼女たちはまず間違いなく従ってくれるだろう。」

「けれども僕は、彼女たちが僕の計画に対して、どんな思いを抱き行動していくかを知りたいとも思っているのさ」

「責任を一人でかぶるつもりですか。もっとも、同意してしまう以上私も同罪ですが」

『大丈夫よ、フェイトは強いわ。なんといっても、私の娘なのだし。それにサイネリアもいるのだから大丈夫よ』

「そうでしょうかね」

プレシアの言葉に迷いはなかった。プレシアは既に心を決めている。その決心は堅い。

『私は私の娘を取り戻したいだけなの。アリシアには可哀想な思いをさせたのだから、その埋め合わせをしたいのよ』

そう呟いたプレシアの目は、フェイトを見るときと同じく優しい目をしていた。

崇は内心、そうすると今度はフェイトが取り残されることに気づいているのだろうか、と首をひねる。しかし、そう尋ねたとしてもプレシアの気持ちは変わらないのであろうと推し量る。

「——分かりました。私も協力しましょう。まずは新暦六十五年の春ですね」

「そうだね。それが無事終われば次のステップに移るまでに時間は充分ある」

『お互いに頑張りましょう。最善の結果を得るために』

三人が頷き合ってから、プレシアの映るスクリーンが閉じられた。

研究室にふたりだけになると、崇が口を開く。

「プレシアの目的は分かりました」

「おや、僕のではないのかな？」

「あれはプレシアの目的でしょう。あなたの目的はなにやら違うところにあるそうですね。次のステップとも言っていましたし」

崇に尋ねられると、スカリエッティは苦笑いする。

「僕はね、管理局という組織が嫌いなんだよ」

「ええ、あなたの研究課題は、突き詰めると管理局の法に引つかかりそうですしね」

「そういうこともある。だが、僕と管理局には少なからず因縁があ

るのさ」

そう答えるスカリエッティの目には、時折見せる遠くを見つめる色が含まれていた。

崇の聞いたところでは、これまでも管理局から内々の――裏の事情を伴った依頼を受け、そのための研究を行なったこともあったという。そういう事情があったとしても、管理局は定期的にいくつもあるスカリエッティのアジトを襲撃して回っている。それはもちろん、スカリエッティの行なっている研究が違法に掠っているからこそ入る正当な捜査なのだが。

この研究所は今の所襲撃されたことはないとはいえ、いつ攻撃を受けるかはわからない。そこに煩わしさを感じることは確かだろう。

「僕の目的、その一つは管理局に一泡吹かせること。そしてもうひとつ、邪魔されることなく研究を行なう環境を作ることだよ」

その言葉、とくに二つ目の方に崇は紛れもないスカリエッティの本音を覗いたような気がする。

「そのためのアレだよ。無事完成しさえすれば、あれは僕の目的を十分果たす環境を得られる」

「なるほど。では、アレを見たことによって変わった私の目的を話しておきましょう」

「……なんだい？」

尋ね返すスカリエッティは、訝しげに、しかし興味深そうに崇に問い返す。

「アレを使って数多の世界をめくり、様々な世界を見てみたいと思いました。そのためにアレは十二分な完成度を目指しましょう。そ

して、あなたの目的を達成するためにも協力をしましょう」

「そうかい、ふふふ、ありがとう、と言っておくよ。これから、楽しくなりそうだね」

「それは同感です」

しばらく、研究室に気味の悪い、低い笑い声が響き続けた……。

第三研究室の入口の前で、眉を寄せて立ち尽くす人影が二つあった。言うまでもなく、ウーノとサイネリアである。

「うう、なんか不気味な声が聞こえるう」

晩ご飯の用意ができたから、と呼びに来てみれば中から不穏な笑い声が聞こえてくる。なんだか怖くて扉を開けることも出来ず、サイネリアはウーノにすがりついていた。

「……はあ、またドクターですか。アレだけはいくら言っても治りません」

ウーノはやれやれ、とばかりに溜め息をついた。しかし内心では自分の主よりもすがりついてくるサイネリアの可愛さにノックアウト中だ。彼女のサイネリアに対する愛情値は常に振り切れている。

「今日はマスターも一緒みたい。……あの二人って、なんだかんだ言って仲がいいよね？」

「ええ、それは間違いなく。この先お二人がどんな道をたどろうと

も、結局最後は共に手を携えてくれると、私は思っています」

「ふふ、ウーノお姉ちゃんがそういう風に言うのって珍しいね。でも、私もそう思うな」

「私たちですよ、サイネリアちゃん」

「大丈夫だよ、だって、私たちみんな家族だもん！」

第四話・その1

【新暦63年5月17日 スカリエッティの研究所・居住区・食堂】

崇が異世界を中心として過ごした生活が一年経った。崇にとって幸いだっただのは、ミッドチルダを中心とした世界の時間が、殆ど地球と変わらなかったことだろう。おかげで、時々地球に戻って授業を受けたり、大学受験を受けたり、入学手続を行なったりするのに、ほとんど時間的な問題を受けることはなかった。

そして、崇にとって一年が経ったということは、サイネリアにとっても一年が経ったということだ。

崇はそこまで気を回すことはなかったのだが、地球の風習を知ったウーノが、サイネリアが目覚めた日を誕生日ということにして、生まれたことを祝う——つまりとところ、誕生日会を開くことを提案したのだ。

居住区の食堂にはスカリエッティ一味からは、首謀者たるウーノとその主であるドクター・スカリエッティ。主賓であるサイネリアと、そのマスター。そして最近やっと目覚めた、ウーノの三番目の姉妹であるトーレの姿があった。二番目の妹ドゥーエは管理局の方で仕事があり、とても抜け出せないとのことではずいぶんと残念がっていた。

そこにさらにテストロッサファミリーからは、プレシアとフェイト、そしてプレシアの使い魔リニス招かれていた。さらに、今年初めに契約したというフェイトの使い魔、アルフモリニスの膝の上に収まっている。

フェイトはサイネリアの隣に腰掛け、ふたり仲良く談笑中。それをさらにその両隣に腰掛けたプレシアと崇が優しげに見つめる。もうお決まりの状態だ。

ウーノが丹精こめてセッティングした会場は“サイネリアちゃん、誕生日おめでとう”とかいう横断幕が張られていたり、どこから持ってきたのか折り紙で作られた輪っか飾り——製作はスカリエッティ一味総出で行われた——がかけられたりして、見栄えは良くなっている。わけわからないなりに一緒になって作っていたサイネリアも喜んでいることから、成功と言ってもいいのだろう。

「さて、皆様」

主催者であるウーノが、立ち上がって声をかける。すると、ピタリと話し声が止まって視線がウーノに集中する。

「本日は、私の小さな妹サイネリアちゃんのお誕生日会にお集まりいただき、ありがとうございます」

「おー」

という歓声ともつかない声と一緒にパラパラと拍手が溢れる。

「とくにテストロッサ家の皆様、常からサイネリアちゃんに良くしていただき、姉としてもとても嬉しく思います。本日はお越しいただきありがとうございます」

「こちら、フェイトと仲良くしてもらっているのだから、私の方からもお礼を言いたいわ。今日は招いていただいてありがとうございます」

プレシアからの言葉に、ウーノは恭しくおじぎして返す。サイネリアとフェイトが嬉しそうに笑い合っているのをみて、みな頬を緩める。

「たいしたおもてなしは出来ませんが、どうぞ楽しんでいてください」

今度こそ全員から大きな拍手が湧き起こる。サイネリアはそれを受けて照れるように笑う。何故かとなりのフェイトのほうが嬉しそうだ。

「ね、ね、ウーノお姉ちゃん！」

サイネリアが、待ちきれないという様子でウーノに声をかける。当然、ウーノもその理由は分かっているので、サイネリアに微笑み返す。

「では、サイネリアちゃん、蠟燭の火を吹き消してください」
「はい！」

サイネリアが答えると、部屋の照明が落とされた。そして会場の光源は、サイネリアの正面に置かれたケーキの蠟燭だけになった。

「ふう〜〜〜っ」

胸いっぱい吸い込んだ息を、サイネリアがおもいきり吐き出す。揺らいた火が一つ二つと消え、七本の蠟燭から火が消え、部屋が真っ暗になる。

瞬間、部屋の証明が再度点灯したかと思うと、部屋中に割れんばかりの拍手が響き渡ったのだった。

「お誕生日おめでとう、サイネリアちゃん」
「ありがとう、みんな！」

みんなのお祝いに、まだ幼いサイネリアは歳相応の輝く笑みを浮かべて喜ぶのだった。

「さあ、お誕生会をはじめましょう」

……

……

……

……

……

宴もたけなわとなった頃、スカリエツティやリニスと話していた
ウーノが、話を切り上げて会場内を見渡して宣言した。

「そろそろ、プレゼントの贈呈と行きましょう」

その言葉に、会場内にいる数名がぴくりと肩を震わせた。
一人はプレゼントを渡されることになるサイネリア。そしてその
傍らでサイネリアと話していたフェイト。そして、意外なことに、
プレシアと談笑していた崇だった。

「ふふ、あなたもなのね？」

そう言いながら、プレシアは崇に問いかける。

その間にも、ウーノの管制によって操られたガジェット・ドロー
ンがいくつかの箱を頭に乗せた状態で部屋を出入りしていた。

数体のガジェットは頭上のプレゼントを落とすことなく、それぞれの送り主のもとへと静かに向かった。

崇やフェイトがそれぞれのプレゼントボックスを受け取り、頭上为空になったガジェットはテーブル上の空になった食器を代わりに頭上に載せ部屋を退出していく。

崇が手に取った箱は、手のひらに乗る程度の小箱だった。それを手に、崇はサイネリアのもとへと向かう。

「えへへ、まずは私からね！」

そう言っ、珍しく声はずませたフェイトが、一足早くサイネリアにプレゼントを手渡した。小柄なフェイトが持つにはやや大きすぎる包装がされた包みを受け取ったサイネリアは、ありがとう、と顔をほころばせた。

「ね、早速開けていい？」

「もちろん！」

サイネリアは逸る気持ちを押さえてプレゼントの包装を解くと、中から出てきたのは。

「くまー！」

「えへへ、どう？」

「もう、こんなもので私が釣られると思うなよーもふもふー！」

サイネリアはクマのぬいぐるみを抱きしめ、フェイトに笑顔を返した。

「おやおや、そのプレゼントの前では、私のプレゼントも霞んでしまいますね」

「ええっ、そんなことないです！ マスターにももらえるなら、とても嬉しいです！」

それでもサイネリアはぬいぐるみを放すことはなかった。とはいえ、ぬいぐるみを抱く力が緩んだ。

「では、私からのプレゼントです。開けてもらなさい」
「はい！……って、これっ」

包装を解き小箱を開けた中に入っていたのは、薄紫色をした宝石だった。

「わあ、これってデバイス？」

フェイトが目を輝かせて言ったとおり、それはデバイスのコアだった。管理世界で流通している魔法の杖——デバイス——は、杖として使用しない格納状態の際は何らかのコンパクトな形態をとっている。それはカード型やアクセサリー型、もしくは宝石のようだったりする。

「マスター、これは」
「見てのとおり、デバイスですよ。もちろん、君のね」

薄紫色の宝石を見て口を開けて驚くサイネリアに、崇は事もなげに告げた。

それは、この一年崇が精力を傾けて製造していた、サイネリアのためのデバイスであった。最初二年もあればと言ったうちの半分の期間で創り上げられた逸品だった。

待機状態のデバイスに見とれるサイネリアの前で、それがキラリと瞬いた。

『Hello, Master』

「え、わ、ええっ、もしかしてこのデバイス……インテリジェント・デバイスなんですか!？」

「わあ、私のバルディッシュとおそろいだね!」

先日、一足早くリニスから専用のデバイスを渡されていたフェイトが喜ぶ。

サイネリアもフェイトもこれまでは通常のストレージ・デバイスを使用していたが、それでは手持ち無沙汰となっていた。二人の能力がストレージ・デバイスの処理能力を超えるようになってきたのだ。

機械的にプロセスを通過させて魔法を発動するストレージには手強い汎用性があるが、フェイトもサイネリアもすでに自分のスタイルを確立させ、先鋭化している。そのため、使用者の思考や無意識さらには癖までも学習し、それらをもとに自らに最適化するインテリジェント・デバイスは主の最大の理解者であり最高の相棒となれる可能性を秘めている。

「そうだね、フェイトちゃん。……マスター、この子の名前は?」

「ハルバードですよ」

「ハルバード……」

「ええ、地球の東欧で使われたバルディッシュに対して、西欧で使われたハルバードから名をつけてみました」

「じゃあ、本当におそろいなんだね!」

「うん、嬉しいです、マスター」

『Thank you now, master』

ぎゅっと胸元にデバイス・ハルバードを抱きしめて、サイネリアは嬉しそうに微笑んだ。

第四話・その1（後書き）

内政パート〓気づいたら終わっているレベル。すみません。

第四話・その2

【新暦63年5月25日 ミッドチルダ・アルトセイム地方・時の庭園近郊】

「というわけで、模擬戦しましょう、マスター！」
「なにが『というわけ』なのかは分かりませんが、相手はフェイトで良いのでは？」

「熟慮の結果、マスターに。フェイトちゃんとはいつもやってるし、それにマスターこの間デバイス完成させてたじゃないですか」

そういえば……と眉間を揉んだりしながら、崇は溜め息をついた。

「それで、何ですこのギャラリーは？」

見れば少し離れた丘の上に、レジャーシートを敷いて見物人が揃って座っていた。

「たまには外に出るとウーノくんがね」

「ドクターは引きこもり過ぎなんですよ」

「今後の訓練の目安にね」

「娘との触れ合いも兼ねて」

「何か勉強になるといいな……」

「あんたの戦うところ、しっかり見せてもらうよ」

「たまには自分で戦ってみるのも、勉強になりますよ」

「何なのでしょうね、このギャラリーは」

上から順にスカリエッティ、ウーノ、トーレ、プレシア、フェイ

ト、アルフ、リニスと口々に応援なのかわからないことを口にする面々に、崇はまた溜め息を吐く。とはいえ状況が改善されたりするでもない。

崇はポケットから濃紺の平べったい宝石を取り出してサイネリアに向き直った。

「仕方ありませんね、先日完成させたデバイスの試運転も兼ねて、やりますか」

『Let's approval. Let someone try!』

「ありがとうございます、マスター」

『I'm going to give him hell』

「は、ハル……。過激すぎない?」

『It's not such a thing』

売り言葉に買い言葉、サクサクと戦闘の機運が高まっていく。

「さて、はじめましょうか。トマホーク、セットアップ」

「わっ、は、はい。ハルバード、セットアップ!」

互いにバリアジャケットと杖を構築して、上空へと舞い上がった。

空中で改めて対峙した二人の手にはそれぞれのデバイスが握られていた。崇の方は名前が表示通りにトマホーク——手斧——が。一方のサイネリアも名前のように槍の穂先に斧がついたハルバードが……というわけではなく、サイネリアの身長のはある細長い大型のライフルが収まっていた。

「うわぁ、すご……ながっ」

「どうでしょうね、ハルバード・ランチャー氣に入ってもらえましたか？」

サイズのわりに軽い様子のハルバード・ランチャーを取り回しながら調子を伺うサイネリアに祟が尋ねる。

「はい、ありがとうございます、マスター！」

それに対しサイネリアは満足氣に礼を言った。

そして改めて対峙し合ったことによつて静かになった空間でサイネリアは僅かな音に氣づいた。

飛行魔法を使つて無音で宙に浮くサイネリアと違い、祟の方からは小さく耳鳴りと聞き間違えそうな音が聞こえてきていた。

「マスター？」

それに氣づいたサイネリアが首をかしげる。

「ふふつ、氣づきましたか」

サイネリアが氣づいた音の正体は、バリアジャケットと一緒に背中に背負う形で装備された件の魔導炉だった。

かねてから開発していた飛行装置は魔法技術を知つた祟の手により、この一年の間にコンパクトな魔導炉として、アップグレードが続けられていた。その結果、初めパソコン本体ほどの大きさだったものも、今では背中に容易に背負えるほどにコンパクト化されていた。

アップグレードの結果、初動に本人の魔力を必要とする以降は周囲の魔力を自動で取り込んで、ほぼ半永久的に魔導師本人の魔力以外の魔力を一定量生成し続けることが可能となった。これをさらに

デバイスを介して魔導師本人の魔力として使用することが出来るようにした結果、魔力タンクとしての役割をなすようになっていた。

この魔力タンクとしてのバックパックは、試用期間を経て問題点の洗い出しを行なった上でスカリエッティ経由で管理局の地上部隊へ供与されることになっている。そこで更に実戦での使用感覚や、問題点を洗い出そうというのである。

「ちなみにこれは、ハルバードにも搭載しています」

「へえ……なんだかすごいね、ハル」

かいつまんだ説明をしたあと、さも簡単なことのように告げる崇に、サイネリアはよくわかっていない様子で首をかしげた。

さらに崇はそれに更に手を加え、本来の目的である飛行装置としての機能を取り付けた。取り込んだ魔力を装置内でエネルギーに変換し推力として放出することで、さながら飛行魔法のように宙に浮くことが可能となっていた。

「まずは飛行魔法なしで行きます。システムの維持、よろしく頼みますよ」

『I know』

安定した推力の維持をデバイスに一任して、崇はサイネリアに向き直った。

「さあ、それでははじめましょう」

「……はい。いきます！」

『Beam Saber』

掛け声と同時に、デバイスを脇に構えてサイネリアは突撃する。

杖——銃口の先端に魔力刃を形成して一直線に。

「トマホーク」
『Ax Form』

斧のように変形した杖に魔力刃を形成してサイネリアを迎え撃つ。突貫してくるサイネリアの攻撃を刃で受けると、身体を沈めて、突撃の勢いを利用してそのまま背後へと受け流す。

「うわっ、ととっ」

攻撃を受け流されたサイネリアは、勢いを殺しながらターンすると、空中を蹴るようにして再び突撃する。

「いきなり奇襲で突撃してきたのは褒めるべきことですかね」

今度は連続して突きを繰り出し、手数を重視して攻撃する。しかしそれを、思いの外軽々と捌かれてしまう。いくら素早く突き出し、ても崇は手斧で受け流し続ける。

ついに焦れたサイネリアはハルバードを勢い良く突き込むが、それは上空に身体を逃した崇にかわされてしまう。

「ベルカ式戦闘法もなかなかですね……」

空中で器用にたたらを踏むサイネリアを見ながらつぶやく。

むしろ魔法という飛び道具でない分把握が楽な面もある。崇のトマホークは特に遠距離戦のみならず接近戦も十分考慮されて作られていた。

武器たるデバイスに直接魔力を浸透させて戦う本来のベルカ式とは若干異なるが、充分格闘戦にも耐えうる性能を示していることは分かった。

「マスター、思ったより凄いかも」

「おや、もうおしまいですか？」

「——ッ、まだまだ、これからです！ ハルバードっ」

『E-mode set』

サイネリアの声に合わせてハルバードは先端に発生させていたビーム刃を消した。

「いきます！」

サイネリアは数発の射撃を瞬時に放ってから、素早く距離を取った。近接武器を持つ相手に射撃をするなら当然距離を取るほうが有利だからだ。

距離を取ったサイネリアは、飛行魔法を駆使して崇の周囲を飛び回り雨霰と魔力弾を撃ちこむ。それを崇は一步も動かずに受け止めた。

「やった？」

着弾と同時に巻き上がった煙の前に、サイネリアは射撃の手を緩めて状況を確認することにした。

「……トマホーク、ユニットの魔力供給力に変動は？」

『Nothing・Supply is fine』

「そうですか。十分な供給量を発揮するようですね」

『Yes, confirmed the stable transformation of energy magic defense』

しかし、白煙が晴れたそこには、何事もなかったかのように手に持ったデバイスに話しかける崇の姿があった。

「き、効いてないんですか？」

眉をひそめるサイネリアに対して、崇はええまあ、と短く返した。

「ところで、もうおしまいですか？」

「んなつ、そんなことはありません！」

崇からの再びの挑発にサイネリアは再び高機動を見せつけながら、崇に対してあらゆる方向から次々に射撃を加え始めるのだった。

上空で揚がる花火を肴に、地上では和気あいあいとピクニックが続いていた。

「それにしても、彼が戦うところははじめて見たけど、意外と凄いわね」

「ええ、確かに……思いの外防御が硬いといえますか」

「完全にデータ蒐集に徹しているようだねえ」

「その場から動かずにと防御に徹していますが、反撃はしないのでしょうか」

「そっか、耐えられるなら動かなくても……」

「フェイト、それはいけません。攻撃を受ければそれだけ次の反撃への機会を減らします。それにあなたは防御力が低いですからね……」

……。あなたの場合はできるだけ攻撃を受けず、回避して、相手の隙を狙った一撃必殺を狙う戦い方が基本ですよ」

「はい」

「どうやらユニットの魔力供給力が防御魔法の使用に耐えられるかの試験のようだね。ほら、全方位型からラウンドシールドに変えたみたいだよ」

「それにしても上手く捌いてるわね。死角からの攻撃はデバイスの自動防御に一任、ってところかしら？」

「あ、動いた」

「へえ、意外な突進力だね」

「それでいて攻撃は避けているみたいですが……」

「彼の意外なセンスを見たわね……」

「ああ、そういえば、彼には僕の推薦で管理局の技術官になってもらうことにしたよ」

「どうしたの？ 突然ね」

「彼の開発した魔力タンクに関する要望をストレートに上げてもらえたほうが楽だろう？」

「それはそうですね」

「まあ、確かにそうね」

「とはいえ、僕も管理局では悪い意味で有名人だからねえ……彼も苦労するかもしれないね」

「おかげで監視の目がそちらに向くからドゥーエが動き易くなるね、と言っていませんでしたか？」

「ははは、何のことだい？ ハハハ」

「デコイですか……まあ確かに、ぎりぎり次元犯罪者のドクター・スカリエツティですしね」

「本当だったら私たちも危ないのだけれど？」

「いやですねえ、私たちは完璧次元犯罪者ですよ？」

「まあ、愉快なことに変わりはないね。ハハハ」

「……………何をみんな揃って馬鹿笑いしているんです？」

「きゅー」

馬鹿笑いしているうちに崇がサイネリアを抱えてやってきた。決

め手はバンドからの一刀両断だったらしい。

「とうわけで、君は今日から時空管理局の技術官だよ」
「……は？ あ、何なんですか、いきなり」

第四話・その2（後書き）

飛行装置の名称は後々開示します。

第四話・その3

【新暦63年5月26日 スカリエッティの研究所・第二研究室】

「技術官になったとしてもやることは変わりませんね」

「むー」

崇は相も変わらず研究室に籠って昨日使用した飛行装置の調整をしていた。

「おや？」

専用の端末にメールの着信があった。時空管理局技術部との連絡用に、この研究所の場所が発覚するのは困るが言いながらもスカリエッティが用意した端末だった。

「昨日の今日で、手回しが早いんですね」

ひとりごちる崇の手元を、足元で唸っていたサイネリアが覗き込んだ。

「なんてメールです？ あ、マスターの開発してる小型魔導炉のことですね」

「共同開発の打診のようですが、そうですね、ベータ版のデータだけ送っておきますか」

「データだけですか？」

「ええ、このデータから連中がどのような方向に開発していくのか、ということに興味があります」

崇は端末に添付したデータを確認したあと送信した。そのデータは、崇が地球で開発していたものをミッドチルダ基準に調整し直したものだ。この段階ではあえて飛行用の翼等の機能をオミットし、魔力タンクとしての機能だけしか持っていない。すでにスカリエッティ経由で管理局に提供されている小型魔力タンクの基礎のようなものだ。

ベータは現在のような推力を生み出す能力もない、ただの魔力タンクだった。ベータの改良版となるガンマ版の段階ではエネルギー変換効率も多少向上しているが、ベータではそれもなし。再初期の段階を提示され、既存のものと同じ方向に開発するのか、それとも全く違った方向へ開発していくのか……それを考えると、これをどう扱うかは崇としても興味深いことだった。

「しかし、昨日の模擬戦のおかげで実働データがわずかながらでも取れたのは喜ばしいことです」

「あうー……」

サイネリアは昨日のことを思い出して無然とした表情を浮かべた。なにしろ、射撃は当たらず、当たっても堅い防御に阻まれてしまったうえ、最後はバインドに捕まったところを一刀両断されてしまったのだ。

「それにしても、ずいぶんと堅い防御でしたよね？」

攻撃を回避されたことは単に狙いや、戦術的な駆け引きが甘かったと考え今後の課題にすることにして、サイネリアは一番気になっていたことを尋ねてみた。

「ああ、あれは飛行装置からの魔力供給を私の魔力に上乗せしてい

たんですよ」

おかげで浮いてるだけでしたけどね、と崇は言う。実際全周囲に防御魔法を張ったときはもちろん、ラウンドシールドで防御していた時も、ユニットからの魔力供給は苦しいところまで来ていたという。それも今後の課題になるとこぼした。

「私の実力ではあなたの攻撃を受け止め続けるのは限度がありますよ。それに、もっと威力の高い砲撃があつたら確実に受け切れないでしょうね」

それでも防御魔法を維持し続けることができたのは、ひとえに半永久機関じみた性能を発揮するユニットがあつたからだと崇は告げた。

ユニットもシステムの限界として供給力の上限は存在していた。その供給力を上回る攻撃を防御しようとすれば、今度は魔導師本人の魔力を防御に回さざるを得なくなる。魔力量の多くない者がそれをやろうとすればどうなるかは自明の理だった。

「砲撃ですか……でも私は高速移動と連射が基本スタイルですし……」

本人が悩む通り、サイネリアの戦闘スタイルは高速での三次元機動と、そこからランダムかつ正確に撃ちこむ射撃で、相手を翻弄しながら動きを抑制し、致命傷を確実に与えていくといったものだ。一撃必殺の砲撃は彼女のスタイルには合わなかった。

「なら、高速機動のさらなる昇華と、射撃の戦術性と正確さを上げることを当面の課題にするといいでしょう」

「わかりました、そうしてみます。あ、でもやっぱり砲撃も……」

「そうですね、いざというときのために切り札の一つくらいは持っていて、罰は当たらないと思いますよ？」

「はい！ 私、がんばりますね！」

そう言っただけで張り切った様子でサイネリアは部屋を飛び出していった。おそらく訓練施設にでも駆け込むつもりだろう。

サイネリアを見送って、崇は作業台へと向き直った。

「魔力供給量はやはり増強したいところですが、周辺の魔力を収集と言っても限度がありますからね。変換効率を上げる事も考えないといけませんかね」

「さて、これが完成しないと、三号機も仕上げられませんし、頑張らないうか」

崇は別のモニターに映していた第三のデバイス、その設計図を一度見て呟いた……。

【新暦63年6月1日 スカリエッティの研究所・第一研究室】

「崇くんの方は順調そうで何よりだよ」

「ええ、まあ、それなりにやっていますよ」

久しぶりに、二人はスカリエッティの研究室で談笑していた。とりあえず二人は最近の近況について話しあうところから始め、互いの持てる情報を擦り合わせていた。

「ドクターの方はいかがなのでしょう？ トーレ以降は特に新しい子を目覚めさせていないようですが」

スカリエッティはナンバーズと通称する戦闘機人を順当に三体目まで目覚めさせたあと、しばらく新たに目覚めさせようとしていなかった。

「ふふ、今のところトーレまでで事が足りるからね、なに、これから十数年ほど余裕があるから、ゆっくりといくさ」

「ふむ、まあ、私はあなたの研究についてなにか言う気はありませんからね。ドクターの思惑があるのなら、なおのことです」

また、ナンバーズにはそれぞれインヒューレント・スキル——略してIS——と呼ばれる特殊な技能が備わっている。それはスカリエッティが意図して持たせているものもあれば、突然変異的に備わるものもある。ISの調整は繊細さを要求されることもあり、スカリエッティであつても時間をかける必要がある。

それだけでなく、スカリエッティは崇はもちろん、プレシアなどにも秘密にして何やら画策しているようだった。何かをやっている、ということはウーノ経由でサイネリアから伝わってくるのだが、何をやっているのかまではわからなかった。そういうことがあつて、崇はひとまずこの話題はおいておくことにした。

「そういう崇くんの方こそ、これからどうするつもりなんだい？ デバイスも、まさか出来るとは思わなかったけど一年で作ってしまったし……」

「ああ……、言われてみればそうですね。あまりに捗ったせいか二つも作ってしまいましたっけ。まあ、一段落ではありますが。まだ三機目もありますからね」

「そうかい。君というイレギュラーが、どう作用するか……僕は非常に興味深いよ」

「イレギュラーですか。以前から度々思っていましたか、あなたはいつも先を知っている……そんなような物言いをしますね」

崇に指摘されたスカリエツティは、彼にしては珍しく虚を突かれたような表情を一瞬浮かべた。すぐにその色は消えてしまったが。

「おや、そうかい？」

とぼけるスカリエツティは、すでにいつものいやらしい笑みを顔に張り付けていた。

「はあ……。教えてはいただけませんか」

「そうだねえ、君には教えてもいいと思っっているけれど、まだ、時期ではないね」

そう言つて、スカリエツティは一方的に会話を打ち切ってしまった。

お互いに自分の研究について究極のところを話していないということ、二人は気づいていた。それは二人のプライドの問題なのかもしれないが、しかしそれが互いに最後の一步を歩み寄れない理由なのだ、二人はまだ気付けないでいた。

その後もしばらくぽつりぽつりと今後のことについて話しあったが、大して実りのない話し合いになったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2259z/>

大空のサイネリア

2012年1月10日00時50分発行